

フランス研修報告

静岡県サッカー協会

COACHING SCHOOL IN FRANCE

2013.3.21-30



1. はじめに・・・フランスで見つけたもの、発見したもの

「よい問いとは、答えは存在するがその答えが容易に見つからないもの」

池谷 孝(指導者養成委員長、清水エスパルス)

1. フランス指導者研修参加者

池谷 孝	清水エスパルス	指導者養成委員長
増田 裕	伊豆総合高校	コーチングスクールマスター
村下 和之	沼津西高校	コーチングスクール
鈴木 啓史	御殿場南高校	2種東部技術委員
大石 知宏	静岡商業高校	コーチングスクール
佐野 伸介	富塚中学校	3種西部技術委員長
古杉 仁志	ヴィヴァーチェ	4種技術副委員長

2. レポートのターゲット・・・野心と向上心、好奇心にあふれた(若い)指導者

日本人が世界のサッカーを理解するには、まだ今のところ、世界に出て自分の眼でみて耳で聞いて肌で感じる事が最良であると思います。加えて、その国の文化、言語、人種、気候風土、人生観、生活、価値観等々をその場に立って感じなければサッカーの違いが覚えてこないと実感します。

当然ですが今回フランスで見たもの聞いたことは、そのほとんどがプロフェッショナルを育成する現場の画と声でした。そういう意味では私たちとしては自分のおかれた立場のフィルターを通して解釈する必要があると考えています。

3. レポート

メンタリティ・・・技術を最大限に生かす要素

フランスではたくさんの専門家からお話を伺うことができましたが、どなたも異口同音におっしゃっていたのがメンタリティの重要性でした。「メンタリティ」という言葉の持つ意味がとても深いことを理解できた旅でした。知性、知識、発想、考え方、気質、心理、性格など先天的なもの、後天的に獲得されたものを問わずメンタリティの解釈は多様ですが、「人間そのものすべて」というのでしょうか。

メンタリティの問題は、よくも悪くも個人主義の強いフランス的課題とも言えますが、日本人には日本人特有の、そして選手個々特有のメンタリティの課題が存在するという事です。サッカーで Mentality の果たす意味を私たち指導者はよくよく考えてみるべきだ

と思いました。

そして、究極的には、技術はメンタル力によって生かされるということを強く感じました。日本人の考えるメンタリティのとらえ方とフランス人のとらえるメンタリティの意味やとらえ方の違いはそのまま、言葉の持つ意味の違いであり、ものの考え方の違いだと考えます。指導者として、話す言語が違えば言葉の持つ違いや深さ、ものの考え方も違うということを知ること指導のクオリティに直結してくると思います。

選手のメンタリティの正体がどこにあるのか？、ポジティブなメンタリティを引き出すには？、自分の選手のメンタリティに合致したサッカーとは？などなど際限なくメンタリティを取り巻く疑問が湧いてきます。選手ひとりひとりのメンタリティの存在は、全体的かつ一方的な指導だけではサッカーの問題が容易に解決しないことを教えてくれるように思います。簡単にひとつだけいえば、ひとりひとりのメンタリティと向き合う、双方向の会話をするということがサッカーを良い方向に向かわせるように思います。

ブラジルワールドカップ予選 フランス対スペイン戦にあったもの…一流のゲームを観る意味

■シャビの首振り…観る、見る、視る、いつも観察して選択する

「観る、いつも観る、ボールのない時に観る、ボールの移動中に観る」、「よいポジショニング、邪魔されない」「タイミング良く動く」「スペースを作る、スペースを使う」

■現代サッカーのスタンダードやトレンドを意識しつつも自分たちのスタイルでサッカーをする

「真似をしようと思っはいけない。自分自身であり続けること。しかし、世界で行われていることについて情報収集しつつ発展していくこと。果たしてなにができるか熟考すること」これは以前のクロード・デュソーさんのレクチャーにあった言葉です。

ボール支配スペイン 7 割強、フランス 3 割弱。ボールを動かしフランスの守備網の中にスペースを作りそこを衝くスペイン、すばやい縦の攻撃からチャンスを作るフランス。圧倒的にボール支配はスペインでしたが、リベリーを核としたフランスが少ないチャンスを決めていれば 2-1 での勝利の可能性もあったゲームだったと見ました。そこにサッカーの妙味を見ました。相手と同じスタイルでその下方に組み込まれない、異なるスタイルのフランスだったからこそ勝利の可能性はあったと思われるゲームでした。

理想とするサッカーを意識しながら、現実には自分の抱える選手のクオリティにあったサッカーを見つけ出し進めていく作業が多く指導者に必要です。理想のサッカーから逆算しつつも、現実には戦術もフォーメーションも選手の技術力、クオリティにあったものを当てはめていく明確さが必要です。多くの若い指導者に、そこにあるジレンマや矛盾を意識しつつ問題を解決することに挑戦してほしいと思います。

そしてなにより、指導者も選手も等しく一流のゲームを観るべきだと思います。そのゲームに「サッカー」が凝縮されています。まず楽しんで、そして何を観るかを明確にして。日本で、Jリーグに足を運んでほしいと思います。多くの指導者や選手に足を運ばせるJリーグであってほしいと思います。

■[60・20・15・5]と[40・40・10・10]…パスサッカーのジレンマに対峙し挑戦する

ジュニアユース年代のゲームで、「ボールを失う原因」をデータ分析しました。およそその60%はパスに起因するものでした。つまり出し手と受け手の関係性やパス技術そのもののミスによって相手にボールを奪われています。また、得点の40%がカウンタ

一、40%がセットプレー、10%がアクシデントで生まれ、パスをつないでいくことによって守備を崩し得点を奪うのは10%であるというデータがあります。

ここには、指導者が「パスをつなぐサッカーを志向する意味」を熟考しなければならない意味があると私は思います。蹴って走ることはサッカーの基本中の基本であり、ボールを奪われないサッカーを目指すことも基本中の基本だと思いますが、このデータを基にするなら、パスを回しながらゴールにたどり着くサッカーを志向することは、指導者も選手も非常に大きなジレンマと対峙しなければなりません。

育成年代の指導者と選手の誰もが、現在のスペインのサッカーが美しく理想的と思いつながりながら、スペインのようなサッカーを実現できるチームがとても少ないということを示しているともいえます。これは、成果を上げるには、パスをつなぐスタイルよりより多く走るスタイルの方が現実的であるともいえます。指導者と選手の理想とするサッカーと、現実の「わがチーム」の現状とどう折り合いをつけて、どこを目標地点にわがチームのサッカーを構築するのかということとは深い吟味と知恵を要することだと思います。

Teach.Coach.Help.Motivate…教え込む、考えさせる、成長を助ける、やる気に火をつける

フランスサッカー学院（INF）統括のプレジャーさんの14歳の選手に対する指導は、教え込みの要素の強いものでした。これまでの日本の一般的な指導に近いといってもいいものでした。しかし、インタビューで、Coaching についてはどうなんですかと伺ったら即座にその意味を理解して「いや、やはり一番大切なのは選手自身が考えてプレーすることなんだ」とおっしゃいました。私にとっては「COACHING」という言語が一致した瞬間でもありましたし、指導の考え方を聞いた瞬間でもありました。コーチングに必要なもののひとつに質問力がありますが、選手に対してもインタビューでも本気にさせる質問力ということの意味を感じた瞬間でもありました。「それはいい質問だ」と相手に言わせる質問力でもいいでしょうか。ピッチ内外でみなさんの質問力はどうでしょうか？それは、言葉と置き換えることも可能です。みなさんの言葉力(伝える力)はいかがでしょうか。

また、クレールフォンテーヌで再会した前INF校長のメレルさんは私たちに、「特にプレ育成のU-15年代は技術が大切なんだ、しっかり技術を身につけてやってくれ、フィジカルトレーニングは大人になってからでもできる。今はそこに時間を費やすよりしっかり技術を身につけることだ。」とアドバイスしてくれました。これは育成年代のスペシャリストの誰もかれもが言うことですが、スタンダードとしてネバーチェンジのところですよ。

さらに、選手を教育し人間として成長させるということは、今回で出会ったすべての指導者がおっしゃっていたことですし、ヨーロッパ、南米を問わずごく当たり前に言われることです。選手の抱える勉強や家庭の問題などに注意を払い人間的成長を促すことは育成年代の指導者の使命だと再確認しました。欧米に比べ日本の社会や教育システムがその部分でストロングポイントを持っているのは事実だと思いますが、日本の社会や家庭環境が変容していく中で、指導者としては継続的に意識する部分だと思います。

そして、ミケルスが育成やチーム構築のために「選手のポジティブなメンタリティを高水準に維持する」必要性を説いているように、選手のやる気に火をつける指導を心掛けることが、よい育成、よい結果に直行すると私は考えます。

育成または勝利か、育成と勝利か

比較論では解決しない。どちらも価値がある。アマチュア育成の事情とプロ育成の事情は同じではない。選手の年齢によって両者の比重は変わる。よい選手を育てれば勝ってしまう。勝たせる中で選手は育っていく。勝利至上主義でない勝利主義。技術をしっかり身につけさせてよいゲームをさせることは普遍的なもの。以上が私の意見です。

その中で、トレーニング指導のシナリオとゲーム指導のシナリオ、個人育成のシナリオとチーム構築のシナリオ、つまりメソッド構築は避けて通れないことだと思います。

実用の用…本質に直行する指導

■分析的思考のすすめ〔現象の分析と改善〕

実用の用とは民芸運動に参加した陶芸家河井寛次郎の言葉ですが、指導上のさまざまな制約の中で効果的な指導をし努力に見合った成果を得るためには、サッカーのトレンドを意識しつつも、選手育成とチーム作りに真に必要な考え方をもってトレーニングを行うことと指導者自身のメソッドを構築することが必要です。

それには、効果的なトレーニングの積算と、ゲームの現象の分析と改善から逆算をすることだと思います。昨日と今日は同じではありません、**Evidence**（根拠）を持って「100点満点の毎日のトレーニング」に挑戦し、さらに、「正しくゲームを分析する」指導者の姿勢を保ってほしいと思います。

コーチは選手の未来に影響を与える

サッカーをする、よいサッカーをさせる。そのためにサッカーの原理原則（**principle**）を押さえながら選手のサッカー観・感を育てる指導をしたいものです。

指導≡〔指導者のサッカー観を伝える作業×選手の持ち味を伸ばす作業〕

トピックス

■ディオメドさん（1998年フランスワールドカップ優勝メンバー）

「指導者の言葉を大切にしている。また、自分を指導してくれた指導者があるからこそ今の自分がある。指導してくれた指導者に敬意を払い、その指導の基盤の上に自分の指導を積み上げていくことが大切だと思う」

■ジラルール・プレッシャーさん（INF統括）

- ▶U-12年代の指導が重要…意識を加えると、ユース年代ではプロクラブが大きなパワーをもっていてジュニアユース年代もその傾向が強まっている。協会が入り込む余地はU-12年代にしかその耕地が残っていきななくなっているともとれる。実際にINFはU-13、14しかなく、それもチーム活動はしていない。選手は自分の所属するチームで週末のリーグを戦う。この状況には、INFでトレーニングをするが選手がどんなチームでどんなサッカーをするかをコントロールできないジレンマが色濃くある。世界に類を見ない協会直属のチームを持ってリーグに参加している日本の近い将来はどうでしょう。
- ▶技術は習慣になるまで（**Automatism**）徹底して教える。技術の自動化、動きの自動化。

実際静岡県選抜とのゲームでは、トレーニングでのシチュエーショントレーニングやドリルを彼らの持つタレント性、サッカーフィーリングとうまく結び付けてシンプルかつ効果的なサッカーをしていた。

- ▶情報を得ること（観ること）の意味を選手は十分理解しなければいけない。
- ▶技術とメンタリティを重視する。
- ▶プレ育成年代の義務は、将来の成功に向けてトレーニングすること。
- ▶球技の中でパスはもっとも重要である。子どもたちは自分がパスがうまいと思い込んでいる。パスの下手さや重要性の自覚を持たせ、パスの楽しさを自覚させる。強いパス、正しいフォームを身につけさせる。

■ I N F フランスサッカー学院U-14 とのゲームでの静岡県選抜の課題

曖昧なパス、曖昧なパスのリズムとテンポ、曖昧な動き(技術+ポジショニング+タイミングの無秩序)、技術のぶれによってパスをつなぐほどボールを失う可能性が高まる。ゲームを読む力、その時やらなければいけないプレーとやってはいけないプレーの曖昧さ。チーム各人のサッカー観の共有。(今後に向けて可能性もたくさんありましたが！)

■ ルゾー・ベルトランさん（パリサンジェルマン育成統括）

- ▶クラブで言葉と価値観を共有する。
- ▶エヴィデンス(根拠) としての選手のあらゆる詳細なデータの管理。
- ▶戦術は、「ポジションサッカーから効率の良いフィニッシュに結び付ける」「4 バックのゾーンディフェンス(ボールに対する守備)」「攻守の切り替え」。
- ▶メンタルの問題の存在…全力を出さない、個人主義、判断力・知性、躰・マナー。

■ ジョン・マルクルドルフさん(パリ地区サッカー協会統括)

- ▶プロクラブに入った年齢とプロになった割合
…U-13 (20%)、U-14・15(20%)、U-16・17 (60%)。
- ▶結果を求めてしまう指導の弊害、結果を求めない指導の弊害
- ▶協会による年齢ごとのゲーム人数設定…スペースをうまく使うサッカー、ディフェンシブなサッカーの排除を意図する。

■ フィリップ・ベルジェロさん（U-18 代表監督）

- ▶日本人の長所は、規律の良さ、トレーニングに対する取り組み姿勢。

■ ジル・ビブさん（アマチュアクラブ、AC・ブローニュ・ピアンクール強化部長）

- ▶各年齢のゲームはより強いプレッシャーの中でプレーさせるために協会のいう人数より1人多くして行っている。
- ▶人間としての教育、やる気にさせる指導、勝ちに行くことを意図する。

最後に、興津団長、膳亀代表初めU-16 静岡選抜関係者には快く研修指導者帯同を受け入れていただき感謝いたします。フランス、エミトラベルの茂木、栗木さんにも懇切な応対をしていただきました。参加指導者の資質向上、成果達成と川口監督率いる静岡選抜の国体での活躍をお祈りして感謝の言葉にかえさせていただきます。ありがとうございました。

II. 研修の振り返りと気づき…フランスの育成に触れて

研修した指導者が現場で何を感じ何を今後の指導に活かそうとしているのかは興味深いことですが、各人の気づきから共有できるものをみつけてもらいたいと思います。

増田 裕(コーチングスクールマスター、伊豆総合高校)

【フランス研修で印象に残った言葉】

「コーチは勝っても負けても、自分自身が変わってはいけない」

「失点しなければ負けない」 …フィリップ・ベルジェロ氏 (U-18フランス代表監督)

「育成年代における選手は勝つ義務はない、しかし、良いプレーをする義務がある」

…ジェラルド氏 (INFサッカー学院最高責任者)

【育成年代では技術・判断を重点課題に、最終目標はチームプレーかつ個性の発揮】

今までのフランスにおける育成年代の指導では技術を一番のテーマとして考え、ボールコントロールやパスができれば良いとしていた。しかしながら、現在では技術だけでなく、ボールがくる前や、ボールがきてから何をしなければならぬのかなどの判断ができる選手育成に力を注ぎ始めている。これはスペインの代表の輝かしい実績やバルセロナの育成システムなどを参考にして、育成ビジョンを転換したとフランス連盟の方が述べていた。4種年代の日本や静岡、みなさんのチームでの育成はどうでしょうか。フランスを始め、サッカー大国の育成システムやビジョンを全て真似ることは最善ではないが、発展途上の日本にとって大いに参考になるはずであり、ヒントが隠れている。日本型や静岡型の育成ビジョンを確立したいものである。

今回、ベルジェロ氏やプロクラブの指導者とのディスカッションで改めて再確認できたことがある。それは育成の最終目標は、ゲームの中でチームプレーができて、かつ個性が発揮できる選手を育てることである。これはどの指導者も頭ではわかっているが、非常に難しいことでもある。日本で考えると4種年代では個人に焦点を当て、技術や判断力、メンタルのスキル向上を図り、3種年代にグループで戦うことを覚えさせる。そして2種年代ではU18フランス代表のコンセプトにあるようにチームの一員として組織で戦わせることを叩き込む。このような育成ビジョンは今回訪れたINFサッカー学院やパリSGなどのプロクラブにはあり、伝統に裏打ちされる育成プログラムや哲学、プレースタイルが必ず存在している。

【静岡のために】

百聞は一見に如かずということわざがあるように、フランスのサッカー研修ではU18フランス代表監督をはじめ、INFサッカー学院やパリSGなどの育成責任者とのディスカッション、ワールドカップ予選フランス対スペイン戦など最高峰のサッカーを観て考え、サッカーの本質を感じることができた。この経験で得たサッカー観や育成システムを静岡の発展のために活かしていければと思う。

村下 和之(CS・沼津西高校)

【自分達の現状といかに置き換えることができるのか?】

今回の研修では、フランス代表・I・N・Fサッカー学院・プロクラブ・街クラブなど様々なものを見させていただいたり、お話を聞かせていただいたりさせていただきました。サッカーに対する整った環境を感じましたし、各指導者・チームの哲学を感じることができました。これをいかに、自分達の現状に置き換えていくことができるかが大切だと思いました。フランスでは、クラブが中心となってサッカーが行なわれていきます。クラブが教育から医療まで行なっていきます。日本では、各種別で異なった形になることが多い実情です。フランスでも、何が良い形なのかを考え続けているなと感じました。高校の指導者として、改めて学校という組織を上手に使えるといいなと感じました。また、TOPTOPの選手を担当する・選手を入れ替えることができない事に対して、どのように置き換えていくかも考える機会となりました。

【ティーチングとコーチング】

今回の研修で、自分の中でのテーマが「ティーチングとコーチング」であった。教え込むことと気付かせることのバランスが自分の中での悩みでした。各指導者とのディスカッションの中で、答えが見えてきた感じがします。教え込まなければならないことは徹底して教えこまなければいけないし、気付かせることも大切にしていかなければいけない。良いコーチとは、解決策を教えるのではなく、良い質問をするコーチであり、解き方を考えさせるコーチではないでしょうか。INFのジェラルド氏がいったように「育成年代において勝つ義務はない。しかし、良いプレーをする義務がある」という言葉は、今後の自分のテーマになる気がします。

【日本の指導者はメンタル面に気をかけない?】

今回の研修で、心に残った言葉として、日本・フランスの両国の指導者を知るタクミ氏が発した言葉があげられます。「日本の指導者はメンタル面に気をかけない」「出る言葉は、ちゃんとプレーしろ、がんばれという言葉が多い」。日頃の自分を振り返ると、ハッとする思いだった。「しっかりしろ!」「がんばれ!」というフレーズは多く使われている。それが、選手のメンタルにどのように響いているのかと考える機会になった。

【学び続けることは決してやめてはならない】

今回、研修に参加させていただき、サッカーに関することはもちろんのこと、フランスの文化に触れ、人間としての自分磨きをさせていただくことができました。感謝の気持ちでいっぱいです。歴史ある建築物や芸術作品に触れたり、若い女性たちが集団ですりを働く様子を見たり、市場での活気ある光景など日本ではなかなか味わうことのできない文化に触れることができました。これは実際に現場で体験しなければ感じることはできません。これからは、指導者としてだけでなく、知識や教養がある魅力のある人間になりたいと思います。魅力ある人間に、人は興味を持つ・人は集まります。「伝える」力には欠かせないものとなるでしょう。よく言われる「学ぶことをやめたら、教えることをやめなければいけない」という言葉を改めて感じることはできました。終わりに、今回の遠征で一番使ったフランス語で… M e r c i B e a u c u o p !

古杉 仁志(4種技術副委員長、ヴィヴァーチェ)

【3つの学び】

まず一つは、『行政との連携』であると感じた。

フランスでは「クラブの格付け制度」を導入することによってクラブをよりよい環境の整備へ向かわせている。そして選手の育成環境・指導者の質を含め、これだけの環境を整えるために多額の費用をかけて育成していることが周知の下になされている。それは昨今の日本とは全く違う点であると大変驚いた。さらに行政が積極的にクラブチームにグラウンドを提供している。グラウンド確保はクラブが一番苦勞するところだが、行政のバックアップにより育成が保たれることは、将来のサッカー底辺の拡大、サッカーエリートへの育成・排出へとつながっていくと思う。基本的にはフランスのサッカー指導もボランティアに頼っていることもあり、指導者の質とクラブ経営を守るために国を挙げてのバックアップがなされている。サッカー王国静岡でもそのような体制が取られたら、もっともっとサッカーが拡大するかもしれない。

次にフランスのプロクラブとアマチュアクラブとの一番の違いは、学校との関連やハード（グラウンド）に悩まされることなく、育成プログラムを行うことができる点である。

子供たちの受け入れ環境とサッカーを継続させる環境の整備、さらにそれに関わるスタッフの質についても大変なこだわりを感じた。

育成センターに通う選手は基本的には寮生活だが、効率よくトレーニングが行われるよう学校の先生が通って来てくれている。トレーニングだけでなく、学業、生活面でも全てに恵まれ、バランスのとれた環境で生活することができる。少人数制にすることで効率を上げ、時間を短縮することでトレーニングの時間を確保している。さらに昼食後の昼寝の時間を設けることにより、効果的な生活プログラムを組んでいる。優れたプロ選手になるためにはサッカー的能力も重要だが、それと同じくらい勉強の成績も大事にしている。ゆえに勉強がおぼつかない子はサッカーが出来ても上のカテゴリーを進めるわけではなく挫折を味わう子も出てくる。プロクラブというと、一見サッカーに偏った思考のもとで生活しているように感じていたが、それは全く違いトータル的に見ても一人の大人として生活していけるような取り組みがされていることは大変素晴らしいことだと改めて感じた。

最後にプロクラブとアマチュアクラブの共通点はメンタルを重視していることである。

サッカー選手である前に人間として・大人としての挨拶・礼儀正しさを大切にしている。そして多少の勝利至上主義的思考を感じることもあったが、試合に勝つ気持ちを植え付けることにも重点を置いている。ちゃんとプレーしろ！頑張れ！という言葉ではなく、勝つためにはどんな声掛けが必要なのかについても考えさせられた。

【まとめとして】

最近では、日本の選手も多く海外で活躍するようになってきた。指導者も自国のサッカーだけでなく、世界を見てしっかりと学習しなければならないと思った。異文化に対する理解も含め、指導者は、国際的な目と感覚を持つことが大事なのだ。それは現地へ出向きその国の風土・国民性・文化を肌で感じ、目の当たりにすることで、気づかされることも多いだろう。今回のフランス指導者研修は私にとって大変刺激となり、あらためて外へ出ていくことの大切さを痛感した。

鈴木 啓史(CS、御殿場南高校)

【サッカーを見ること、サッカーに触れること、サッカーの話をすること】

今回の遠征では本当に多くのことを見て、聞いて、体験することができた。フランスの

サッカーや文化を肌で感じる事ができたこと、多くの有名な指導者とディスカッションができたことは大きな刺激となり、これからの自分のチームやサッカーに対するモチベーションをさらに上げるきっかけとなった。育成年代で重要視していることやトレーニングの内容などは日本で行われているものとあまり変わりはないが、県選抜との試合では球際の強さ、プレーのスピード、ゴールへ向かうプレー、フィニッシュの精度などの差を実際に見ることができた。またディスカッションや研修員同士のサッカーの話の場が多く、新しい発見、共有、確認の場が自分にとって大きな収穫であった。この遠征に同行させていただき、支援して下さった多くの方々に感謝するとともに、今回学んだことを自分のチームや地域、SHIZUOKAのために生かしていきたい。

【改めて感じた技術の必要性】

W杯予選フランス代表対スペイン代表の試合を見て、試合の保持率は30%対70%。特にスペイン代表の技術の高さに驚かされた。蹴る（スピード、コース）、止める（ボールの置き場所）、走る（ボールを受ける前、出した後）、動きながらあるいはフリーなポジションに入ってボールを受けることが洗練かつ徹底されていた。90分間そのプレーを続けるフィジカル、メンタルも世界最高レベルにあると感じた。

【日本の学校教育の良さ】

年齢別フランス代表の監督を務めたことのあるロドルフ氏、ベルジェロ氏両氏は日本人の練習に対する取り組み方や勤勉さを評価していた。現在のフランスのサッカーは態度の悪い選手は代表選考させなかったり、挨拶や練習に取り組む姿勢、努力することを重要視したりなど日本では当たり前に取り組まれていることが課題となっている。

日本の学校教育は家庭との連携、学校生活、部活動等、指導者が子供たちの活動全てに関わっているのが高い教育力が生まれているのだと感じた。フランスでは一部のプロクラブが寮を備え、授業とトレーニングができる施設を持つが、家庭で過ごす時間が短かったり、指導者はピッチの上でしか選手の様子が分からないことが多い。日本には日本の良さがあり、それは世界的に見ても強みとなっていることが確認できた。

佐野 伸介(3種西部技術委員長、浜松市立富塚中学校)

【『メンタルが技術を生かす』技術重視からメンタル重視へ】

いくら高い技術を身につけていても、それをゲームで発揮することが出来なければもったいない。フランスの指導は以前まで技術を最重視してきたようだが、今回訪問したどの指導者についてもメンタルについて強調していた。

実際にカウンセラーを活用し、①ストレス②モチベーション③態度をチェックし、選手のメンタルケアをしてコントロールしている。

元大分トリニータのユースに所属していた、たくみジャンン氏（現在はACBBコーチ）は日本とフランスの指導者の大きな違いは、日本人コーチはメンタル面を気にしないこと。「がんばれ」とは言うが、勝つ気を植え付ける言葉掛けはないと指摘した。

選手への指導力は大切であることは言うまでもないが、選手のやる気を奮い立たせる言葉を見つけることも指導者の能力であると再認識することができた。

また、自チームの選手に対してゲームに出られない選手のモチベーション維持やメンタルケアを意識的に取り組んでいくことも必要であると感じた。

【指導者とは】

◇**ジョンマルク・ロドルフ氏**（パリ地区サッカー協会統括・フランスGKプロジェクト）

『良い選手は良い指導者の下でしか育たない。』

◇**ディオメド氏**（98年W杯優勝メンバー）

『指導者の言動が与える影響は大きい。指導者の土台の上に土台を作る。次の世代につなげる大きな存在である。』指導者の責任と存在の大きさについて認識すべきだ。

◇**ベルジェロ氏**（フランスU-18代表監督）

『選手の見本となること。』大切な事は…

- ・ミスを認めること
 - ・選手を笑わせることも大切
 - ・選手を驚かせることも大切
 - ・勝っても負けても自分自身を変えないこと
- 「失敗しても努力したなら許す」

◇**ジラール氏**（INF統括）

良い指導者は、選手に良い問題や発問ができる。そして、解決策は自分で考えさせる。コーチングするには、知識がなければいけない。しかし、知識があっても伝える力がなければしょうがない。

【好奇心、探究心を持つこと】

常に「なぜ？」「どうして？」という疑問を持つことが大切であると学んだ。答えを探すことやその過程で自分が成長していくと思う。これは答えのないサッカーにおいても同じことが言える。

【目(見る)、耳(聞く)、触る(感じる)こと】

『サッカーのプレー中の情報は“目、耳、触る”ことで得ることができる』とジラール氏が話してくれたが、今回のフランス研修も同じことが言える。実際にフランスに行き、目で見て確認し、本物に会って多くのことを聞き、触れて感じることで多くの発見や情報を手に入れることができた。

その国の文化がサッカーにそのまま反映されているということを感じる事が出来た。フランス人は個人主義である。個人が基本で、個人が目標である。サッカーにおいても、個人が基本である。自分の役割を果たせない選手、ミスする選手に対して周りは厳しい。その点、日本では個人に対して甘い気がする。全体主義、グループ活動が得意な日本人は、思いやりや助け合いが良い所である。その反面、全体のことを考えるあまり個に特徴がある選手が出にくい環境なのかも知れない。

本田佳佑のような「俺が、俺が！」という少し自己中心的な選手が多くピッチに立ち、日本人の良さである規律や献身的なプレーを追求すれば…。と言っても、日本人は日本人。フランス人のような個人主義になれないので、指導者は選手個人を尊重し、特徴を消さない指導を心がけて行くことが必要である。

「選手には勝つ義務はない。良いプレーをする義務はある。明日勝てばよい！」

大石 知宏(CS・静岡商業高校)

【シャンパンサッカーは個人主義の中で生まれたのか】

指導者として行く、はじめての海外、フランスであった。正直、自分のチームを10日間見られないことに対する葛藤が心の中で渦巻いていたが、帰ってきた今この経験は刺激的で且つ、自分のこれからの財産となったと感じる。フランスの自動車は10台の内、9台がマニュアル車、1台がオートマ車といわれるように強い個人主義文化に触れ、またトレーニング&ゲームの中でも激しい個人主義（仲間、ベンチに対する主張、on the ballでの責任感があるプレー）は、芸術（エレガント）と言っていいほど魅力的に映った。さらに、育成のトップトップの雰囲気醸し出し、CLUBの色で統一されたサッカー施設は、緑の美しい芝と融合し、スペクタクルなサッカーが展開される予感さえした。

【1つのトレーニングで、数多くのオプションをもつ指導者になりたい】

トレーニングにおける発見は、正直少なかった。どれもこれも、静岡県内で行われているトレーニングと大差はなかった。しかし、そのトレーニングを良く考え、良く見ることで、良い指導者に欠かせない要素としては、『1つのトレーニングで選手に刺激と思考をさせるオプション、変化をつけることができる指導者』ではないかと思えた。『魔法のトレーニングはない』と良く言われる。確かにその通りではあると思うが、魔法のトレーニングに近いトレーニングはあるのではないか。つまり最良のトレーニングはきっとあると確認できた。自分のチームをもっている指導者は、日々選手と接し、顔色を見ることができ、コンディションも把握できる。また、チームの長所、短所、個人も同様に知ることができる。つまり、今この選手にはこのチームには、このteaching&coachingが必要だと判断し、決断する。そのタイミングと選手を変えることができる明確な指導方法を合わせれば、魔法と同じ効果が期待できるのではないだろうか。勝利に未練がましい指導者、明確なサッカー観を思考している指導者、そして選手の判断を尊重し、修正できるコーチング得ている指導者には、きっと見えてくるものではないか。

【良い指示(しじ)で、高い支持(しじ)をされる指導者になりたい】

印象に残っている言葉として、クレールフォンテーヌの育成責任者のプレッシャー氏が『良い指導者は、選手に答えを教えるのではなく、解決策(ヒント)を与え、答えは選手自身が見つかる』と【即答】したこと。コーチング=選手の判断、決断の考えが即答されたことに驚きも感じた。即答されたことが、コーチングとは何なのかという日々自問自答していた迷いを晴らしてくれた。選手から慕われ、選手を導く指導者は必ずとっていいほど、自分なりの自分だけの良い指示をもっていると再確認できた。

【出会いは、出愛になると信じて・・・】

最後に、大切な国体の強化遠征に帯同させて頂き、川口監督をはじめとしたスタッフの方々に大変感謝しております。ありがとうございました。また研修員の方々とサッカーを共に見て、共に感じて、共にディスカッションして、共にサッカーに向きあったことは、私にとってかけがえのない10日間でした。心からありがとうございました。

Merci beaucoup!!

Ⅲ. インタビュー&ディスカッション(VTRより再現)

以下のインタビューとそのやり取りには、今回の研修のエッセンスが凝縮されているように思います。サッカーの本質に触れる質問や答えの引き出しができたかどうかという課題もありますが、それぞれ立場や所属する組織を異にする各スペシャリストのサッカーの話は、私たちのサッカーに対する考え方や指導を膨らませたり、シンプル化することに役立つと確信します。そういう意味でも読みこんでいただければ嬉しく思います。

■ ジョン・マルク・ロドルフさん(セーナ北地域リーグ最高責任者)3月23日(土)

元フランス代表のGKであり、現在パリリーグ技術アドバイザーである氏。温厚な雰囲気です。フランス協会側の立場であるが、答えにくい質問にも丁寧に答えていただいた。

近年スペインサッカーが世界の中で台頭しているの、スペインサッカーを意識しフランスのサッカーの焦りを醸し出していたように感じた。



Q: 地域選抜U12(日本でいう県選抜か!?)の選手選考の基準は?具体的に教えてください。

A: カルテ(成績表)を作成している。特に、テクニックを重視している。また、メンタルも重要。あくまでも総合評価である。生まれ年、左利きなどもデータをとっている。早生まれの選手を重要視している。スピードテスト(40メートル)、身体能力(持久力)の結果も管理している。

Q: どうして、早生まれの選手を優遇するのですか?

A: UEFAからの指示で年代別代表があるからだ。

Q: 左利きの選手がフランスは多いというイメージがありますが・・・。

A: ノン、左利きが少ない。どのクラブも左利きを探している。統計だが、左利きの方がアクションスピードが速いというのは、テニスのデータからわかっている。だから、左利きの選手を探している。

話は変わるが、良い選手は、良い指導者に指導されないと育たない。最近、指導者が自分の勝利を中心として選手を指導している。これは問題だ。現在、フランスの技術委員長が発案で勝利至上主義を正すために、U15リーグの競争主義をなくそうとしている。つまり、下のリーグへの降格、上のリーグへの昇格をなくしすべてのチームが均等にしようとしている。

ちなみに現在、U15リーグは10リーグに別れている。

Q: 指導者サイドから考えると、ゲームを通した競争がないとやりがいを感じないのでは・・・。

A: その通りではあるが、指導者の仕事は、良いサッカーを教えることだと考えている。

Q: それでは、勝つことを目指さない指導の弊害は教えてください?

A: 当然、サッカーで勝利を目指すのだが、シーズンで勝利することを優先してほしい。週末に勝利するのではなく、これも大切だが、選手全体のレベルアップをまずありきにしてほしいと考えている。

U9以下は5人制、U11以下は7人制、U13以下は9人制、U15以下になってはじめて11人制になる。指導者が指導したい人気があるのは、U15。指導者に対しては、どの年代を教えることができるのかというフランスサッカー協会のライセンスがある。今後、指導者ライセンスの見直しの最中である。(・・・以下省略)

Q: 年代別の指導方法を具体的に教えてください。

A: U13歳では、本能を利用して、ボールを持ったらどんなプレーをするのかという自由を与えている。判断力を教えている。例えば、今ボールが来た！！その時技術がなくても何をしたらいいのかを教えている。

メンタルはインテリジェンス。インテリジェンスは、状況判断とやる気。今までは、足下のボールさばきだけを重視していたが、変化してきた。U13はとっても重要な年齢だ。ボールが来て判断するのではなく、ボールがないときに判断するのを強く求めている。技術＝優秀選手ではない。優秀な選手は、チームプレーができる選手。

Q: フランスの子どもは、チームプレーが苦手なのですね？

A: そうだ。そういう指導を受けていないから。

Q: 日本はチームプレーな得意な子が多くて、個人プレーが苦手なのですが(苦笑)

A: スペインは、チームプレーができる。ダイレクトプレーができる。そして、オフザボールの状況でスペインの選手は考えている。

Q: U9以下は5人制、U11以下は7人制、U13以下は9人制、U15以下になってはじめて11人制を行うということですが、このことについてもう少し詳しく教えてください。

A: これは、今問題になっていて改革をしようとしている。U13は9人制。来年は、U13は間違いなく8人制になる。

フランス連盟は、できるだけ幼年期において少人数のサッカーにしたいと思う。それは、ボールタッチの回数、スペースを上手に利用出来ることを身につけて欲しいと考えている。選手の創造力を養うためにも。この年代で11人制だと、指導者は守備に力を置きたがるというのが問題だ。

Q: 日本サッカー協会もフランス協会を真似し、ゲームの人数を減らしています。反対意見も多いのですが…。個人を育てたいからと協会はうたっている。それについてはどうですか？

A: U13の技術というのは反復練習で身につく。ただ、この時期に戦術を理解しないと、その技術も生かすことはできない。ジレンマがあるのも事実だ。ただ私は、フランス協会の人間なのでパリ近郊のクラブには少人数のゲームを行うよう伝えている。日本はどうだ？

(研修員) 日本もU12まで8人制になりました。

Q: フランスでも11人制ではないゲームに反対意見も多いのでは。

A: そうだ(苦笑)。個人的には、少人数制は賛成だ。体格のことも考えて、コートも小さくすれば、技術は高まる。チーム数も多くなるし、数多く試合ができる。繰り返すが、フィジカルがない選手は少人数の方が良いと思う。

先ほど言い忘れたがフランスでは、11歳まで3号球のサッカーボール。14歳になってから、はじめて5合球。ゴールの大きさは2m7m。

さらに、11人制になるまでは、GKはパントキック禁止。20分ハーフ(10-2-10)、2分は、タイムアウト的に。これは、試合中ずっと叫んでいるよりも効果的だと思うので、2分間は必要であると個人的に考えている。

また、これから選手の出場時間数の制限を設けると思う。一人あたり、50%にしようと考えている。結果主義をなくしたいため。ベンチにいる選手も未来があると思うので、試合を経験させたいという想いで。下のカテゴリーでは、タイトルという言葉はいらぬ。個人を伸ばすことが必要だ。

- Q: フランスサッカーの問題として、チームプレーが苦手だと言われた。それを克服するための手段は？
- A: ピッチ外では無理だな（苦笑）。チームプレーが重要であることをピッチ上で身につけさせること。指導者が繰り返し繰り返し伝えること。技術がある選手＝優秀な選手ではないという考えを持たなければならない。仲間の力を引き出すことが大切だと選手に伝えたい。
- Q: U13まではある特定のポジションに特化させるのか？あるいは様々なポジションを経験させるのか？
- A: U13までは、どこでもできる選手を育成したい。U14, 15からはスペシャリストを育成しようと考えている。U13以下の年代では、GKにもDFなどを経験させるようにしている（ポリバレンタ）。
- Q: 先ほど、プロクラブの育成組織に入った年齢とプロ契約した選手の関係が、U13で20% U14、15で20% U16、17で60%という数字がありました。これは、どういう意味なのか。フランスのプロクラブはこの数字を知っているのか？このデータでは、フランスのプロクラブが日本でいうJYのカテゴリーチームを持たないで、ユースからチームを持つことを選択するのではないか？ どうお考えですか？
- A: まずプロクラブは、U12、13でも最高の選手を集め、チームを組織する。これは変わらないだろう。前提として、15歳以下の選手をプロクラブから50km以上にあるところで生活をしている選手は取ってはいけない。だから、15歳までの遠くて優秀な選手は、16歳からプロになる約束契約をしている。
- Q: つまり、フランス協会の育成とは別に、育成センターやプロクラブ間で、U15までの選手の熾烈な奪い合いがあるということですね？
- A: 想像できないくらいすごいですよ（苦笑）。例えば数年前、あるパリ近郊のU13の試合を見た。その時、スーパーな選手が3人いた。その時、私だけ試合を見ていた。しかし、2ヶ月後、同じチームの試合を見に行ったらスカウトが20人いた。結局彼らはPSGにいった。現在11歳の試合でも、スカウトは行っている。正直、尋常ではない。現在、プロクラブは多く選手をとって、使い捨てのように簡単に切る。これは問題だ。
- Q: フランスサッカー協会の育成センターが国内11箇所あるが、以上のようなことと関係しているのか？
- A: 約束契約をしている選手はたくさんいるだろう。また、プロ選手のデータから育成年代で家庭生活を送っている選手は成功している。つまり、家庭教育はとても大切だ。12歳で、どこかの寮に入ってサッカー漬けになっても20%しかプロにはなれない。11箇所の育成センターからは75%プロクラブのユースに入っている。
- Q: INFのような育成センターで選手がうまく育つからプロになれるのですか？
- A: プロになるには、あらゆる要素が必要だ。技術も、メンタルも。さっきも言ったが週末だけでも家庭生活に戻って家族とともに時間を共有したほうが絶対に良いということは明確だ。そして、プロになるかどうかは運も必要だ。
- Q: 日本では、月1回良い選手を集めてトレーニングをしている（トレセン活動）。これは、意味があると思いますか？
- A: 良いことだ。素晴らしいことだ。我々もレベルの高い選手を集めてそのような活動をしたと考えているが、その施設がないからできない。
そこでは指導者も集めて、指導者研修も一緒にやらしてもらえばもっと、良いのでは。当然、ライセンスを持っている指導者もいると思うが、リフレッシュの意味でもね。しかし代理人がそのトレーニングに来なければね（苦笑）
パリは、大きな石を1つ取り除けば、その石の下には良い選手がたくさんいる。パリ

近郊には多くの原石がある。それが今、私が仕事をしているやりがいにもつながっている。

■ベルラン・ルゾー氏(PSG育成センター長) 3月24日(日)

彼は、フランス1部リーグ(マルセイユ・ソショー・モンペリエなど)で350試合、2部で50試合出場された元プロ選手である。議論ははじめ、膨大なオリジナルデータを中心にPSGの凄みを感じられ、質疑応答ではかなりの興奮の中、白熱したサッカー論議が交わされた。



Q: 自分で考える力がない選手がいたら、どういう指導方法をしますか?

A: 引きだそうとはするが、うまくいった例はあまりないな(笑)

今、PSGはオイルマネーの影響で、今までとは違う次元になった。選手を買ってこることもできる。育ててもビッグネームが買われて来るのでトップにあがりづらい現象が起きている。

Q: 指導者が教え込むよりも、問題解決能力を引きだそうとすることについてはどうお考えか?

A: 意味はあると思うが、限界もあると思う。選手1人1人をサポートするのは当然だが、まず各個人に対して、指導者が教え込む時に言うことを聞かなければその選手は去っていくべきだと考える。チームの構築を優先する。指導者が選手目線で判断はしてはいけない。あくまでも選手が指導者の目線まで来るべきだ。

Q: ポゼッションサッカーを効率よくシュートまで持っていくためにはどうしたらいいと考えていますか?

A: まず、ポゼッショントレーニングでも必ずゴールをつける。ポゼッションのためのポゼッショントレーニングは行わない。W-UPでは良いと思うよ。サッカーはゴールという目的があるスポーツだから。

(図を書いて説明)ただの5対2のトレーニングではなく、5回パスを繋いだらゴールを目指すような。あくまでもゴールを目指すという目的が重要。

Q: 4バックのゾーンDFは具体的にどうしたらうまくいくのか?

A: まず、DF4枚個人が1対1に強いこと。負けないということ。個人の力は必須だ。そして、個人的な見解だが最終的にボールを奪いに行くのは個人だ。ゾーンは安心感やみんなで助け合うという保険に過ぎない。個人が強くなると先には、進まない。

Q: 守備では、ボールを中心に守るのか?相手を守るのか?

A: 自陣のゴールに近づけば近づくほど、両方だよ。どちらかという極端なものではない。

(図を書いて説明)サイドバックの正しいポジションについての説明。相手FWの枚数やその個人能力の状況に応じて考えないといけない。DFの枚数などの数の論理は個人によって見解は変わる。

Q: マンマークに弱いDFがいたら、どうしますか?

A: 1対1を強化するトレーニングをする。ただ自分の選手の質を見て、指導者が判断することが最も重要だよ。

Q: サッカースクールについて説明をしてください。

A: 選考会は開催する。ただ、地元の選手は基本的に受け入れようとしている。エリート

部門とスクール部門があるが、入替もある。毎年、エリート部門へ2人ほど昇格する。スクール部門では、保護者との関係性も大切だ。PSGのイメージも大切なので。育成段階では、10対0で勝利するよりも拮抗した対戦相手と試合をすべきだ。現在U19は大差の付くリーグには参加せずマンチェスターCやユベントス、シャルケなどとトレーニングマッチを行っている。そちらの方が現実的だ。

Q: サッカースクールはビジネスですか？

A: ノン。ビジネスとは考えていない。

Q: サッカースクールの会費は？

A: スクールは1年間で約3万円。育成に関しては、株主が費用を出している。育成の選手は、みんな給料をもらっている。15、16歳は約月10万。そうしないと、他クラブへ逃げられるから。

Q: プレ育成の契約はどうなっていますか？

A: 13、14歳はアマチュア。だが、サッカー用具はPSGが負担している。両親には、年40万ほど交通費として渡している。

Q: プレ育成の選手が、他のクラブから引き抜かれる時にお金は発生しますか？

A: 15歳からは、年9万ユーロの移籍金が発生するようになっている。他のクラブに行かないようにと選手一人一人誓約書、契約書を書かせている。13、14歳は法的な拘束力がない誓約書だけが存在する。育て損はしないようにしている。去年、PSGとはプロ契約できないと伝えたためPSGプレ育成の15歳になった選手がフルハムへ移籍し、プロ選手になった。フルハムは、PSGに対して3,000万円払ったけど。

Q: 例えば、11歳のメッシがPSGにいて、バルセロナが買うといたらどうなりますか？

A: 基本的には、16歳未満の移籍は法律上難しい。家族をパリからバルセロナで移住させないといけないし、費用がかかる。でもバルセロナはできるかもしれないが。移籍金は発生しない。0だ。

今、パリ近郊に、とっても良い12歳の選手がいる。マンチェスターCは家族全員をマンチェスターへ移住させようとしている。PSGは取れないかもしれない。

Q: それでは、11歳のメッシが自分のチーム(町クラブ)にいたら、育て損ですよ？

A: 泣き寝入りだな(笑) まあ、メッシのような選手は、そう簡単に現れないよ(笑) PSGは、フランス国内のプロクラブで育成費は8番だ。総予算費の2%、5.5億円。

Q: INFに選手を送っていますか？

A: いない。PSGの選手は、自分たちで育成する。INFとゲームをすればPSG勝つ。しかしここ2年間練習試合もしていない。選手の取り合いは、年1、2人ぐらいかな。

■フィリップ・ベルジェロ氏(フランスU-18代表監督)3月25日(月)

とても親切な人柄で、素敵な雰囲気をもった監督であった。また、将来日本のJリーグの監督を目指していると言われたように親日家の方であった。大柄な体格でGKとして活躍し、PSGなどのトップチームの監督経験があるということであった。話し方は、ゆっくり話をされ時折、冗談を混ぜながらアットホームな雰囲気でも話が進んだ。



Q: 年間でどれくらいのu-19フランス代表の活動がありますか？

A: あまりない。年間にいくつかの大会に出るくらいだ。

Q: 年間の活動が少ない中で、どのような方法でチームに自分の考えを伝えるのですか？

A: 組織で戦うことを言葉やトレーニングメニューで伝えている。南アフリカフランス代表チームの一体感の無さの失敗は、知ってのとおりだと思うが、U-23フランス代表がヨーロッパ選手権において、AWAYで1-0で勝利したが、HOMEの試合の前日の夜、クラブで遊んでいた選手がいたため、翌日3-5で敗れヨーロッパ選手権の出場権を逃した。だから、人間的にしっかりしている選手、教育力が高い選手を選んでいる。それが今のチームにも教訓として生きている。また、栄養面も重要視している。

例えば、代表に呼んだ選手で2ヶ月後4kgも体重が増えていた。体脂肪のデータで、12%を超える選手は代表に入れない。体脂肪が高い選手は、怪我をする可能性が高いから・・・。

Q: 選考基準はハイレベルな選手といわれたが、ハイレベルのプレーヤーの定義は・・・。

A: 技術が高い選手、メンタルが強い、持久力が高い選手を選ぶ。持久力については、データ管理をしている。そのデータから7、8人はフランス代表にも将来なるだろうと予測がつく。

しかし、最も重要なことは個人技術だ、最後は。試合は停滞しているときは、どうしても個人技術に頼る。特に攻撃の部分は、個人の創造性に頼る。私の攻撃面における指示は、自由にというのを伝えている。守備面では、ルールを厳しく繰り返し伝えている。

Q: 現U-19の選手でINFF出身の選手は何人ですか？

A: 3、4人です。

Q: U-19よりも下の年代の代表があると思いますが、現U-19に上り詰めた選手は何人ぐらいですか？

A: 18人中、11人ぐらい

Q: 様々なクラブから集める代表選手をうまくコントロールする方法があれば、教えてください。

A: 心理カウンセラーを入れて、選手のメンタルケア(ストレス・モチベーション・態度)をしている。カウンセラーが言うことは、いつも正しかった。例えば、ナスリはフランス代表で活躍をしたが、育成段階からメンタル面の悪さを指摘されていた。しかし、最後は自分自身の目で選手のメンタルを確認する。バスの移動時でも選手を見ている。もし、遅刻してきたら罰金を設けている。選手は20ユーロ。

指導者が遅刻してきたら、その3倍。私自身も先日、記者とTELしていたMEETINGに10秒遅れた。だから、罰金を払ったよ。(笑い)指導者がお手本にならないとね。選手と指導者の近づきも大切。そのために、選手を笑わすこと。これも大事。私も選手が聞いている音楽、歌手にも興味をもって近づこうとしている。最後に、選

手には「監督を裏切るな」と伝えている。

Q: もし、フランスU-19の選手が真面目で一生懸命する選手が集まったら、きっと世界1に近づくとと思う。その世界1になるために、必要なことは？

A: 運。2004年我々はヨーロッパチャンピオンになった。決勝の相手は、スペインであった。ファブレガスのシュートはポストに当たった。もし、入っていたら負けていた。だから、運。あえていえば、ピッチ上のゲームを支配するための知的さかな。

Q: では、今のU-19の選手達は、ピッチ上で世界1になるためのクオオリティーを持っていますか？

A: うーん。先日ドイツと試合してみて、7、8人はすばらしいのだが、ベンチを含めて選手層が薄いと感じている。

Q: なぜ、7、8人しかないのですか？

A: そういう世代だから。ベンゼマの世代は良かった。そういうものだよ。人生はサッカーだけじゃないだろ（笑）

Q: あなたは、教え込む指導者ですか？

A: ノン（違う）。私は、引き出すタイプの指導者であると自分では考えている。私を裏切る行為をした選手は、許さないが。常に成功することは難しい。頻繁に私の父が、人生は努力することが大事だと私に教えた。私は、PSGの監督の時に、負けが続いたときにファンから叩かれた。監督として大事な「勝っても負けても自分は自分自身でありつづけること」試合に勝っても偉くなるわけではない。

■ジル・ピブさん(A.C.B.B育成統括) 3月25日(月)

ACBBのU14からシニアまでの強化部長である彼は、革ジャンを羽織り大柄な体格であった。話し方はとても物腰が柔らかい方であり、ユーモアがあった。同席したタクミ・ジャンン氏は現在ACBBのU19で活躍され、日本人とフランス人のハーフであり1年間、日本の大分ユースでプレーされた経験を持たれているということであった。



Q: この育成の枠組みをお話してください。

A: このクラブは、フランスで2番目に人数が多いクラブ。4歳から大人の45歳あたりまでで1,200名所属している。11人制のサッカーチームは22チームある。6~12歳までの所属人数は450名。13歳からベテランまでの11人制サッカーチームは500名。残りは、指導者スタッフなど。

このACBBには日本人チームもある。70名所属している。毎週土日活動されている。日本とパートナーシップを結んで、来年からは20歳ぐらいの選手が語学留学を含めて、3名来る予定だ。

Q: 下のカテゴリーは、何人制のサッカーをやっていますか？

A: 6歳は5人制。7歳は6人制。8歳から7人制。9歳は8人制。10、11歳は9人制。12歳からは11人制。

Q: 先日のフランス協会ロドルフ氏のお話と人数が違うようだが・・・。

A: その通りだ。制度違反だとは思う。よって公式戦は参加できない。制度より1人増や

している。練習試合で育成をしている。ロドルフ氏は快く思っていないようだ（苦笑）

Q: どうして、1人増やしているのですか？

A: 我々の目標は良い選手の育成だ。より難しい状況、11人制のサッカーに近い状況で、プレーしてもらいたいからだ。

Q: 指導者は、各カテゴリーで何人ぐらい？

A: 選手10人に1人の割合だ。9歳からは、担当コーチを付けている。

Q: 1週間のトレーニングは、どんな感じですか？

A: 6歳は1週間に1回（土曜日）。10、11、12歳は週に2、3回行っている。このカテゴリーには、A、B、C、Dチームに別れている。

Aは週練習3回。B、C、D、は週練習1回。試合は1週間に1回。選手の入替もある。指導者同士で、話し合い入替は頻繁にある

Q: このクラブでINFに通っている選手はいますか？

A: 毎年、2人ぐらいかな。今も最終選考で2人残っている。

Q: 育成で成功を収めているということですが、何か秘訣はあるのですか？

A: 外からの補強を毎年、しっかり行っている。13歳のチームは、毎年10人補強している。半径60kmからスカウトをしている。

Q: 専門のスカウトがいるのですか？

A: 特にいない。私はよく他のクラブの試合を見に行くが・・・。

Q: 練習時間は？

A: 90分～120分。11人サッカーは、18:00～20:00まで。その後のチームは、22:00ぐらいまで。

Q: クラブの指導者間の研修や横のつながりは、どんな感じですか？

A: このクラブのサッカービジョンはない。各指導者に任せている。

Q: ジブさんが、このクラブにあった指導者を連れてくるということではないということですが？

A: 本当はしたいが、費用がかかるからな（苦笑）

Q: クラブの指導者のライセンスはどうなっていますか？

A: だいたいみんな持っている。日本でいうC級以上は。トップチームの監督はA級を持っている。今回の静岡県選抜のコーチをされているバレー氏もA級を持っている。

Q: タクミさんに質問しますが、日本の育成はどうしたら成功すると思いますか？

A: 日本はフィジカルが弱いから、そこを鍛えたらいいと思う。フランス人とは体つきが全然違う。フィジカルトレーニングに重きをおくべきだ。

Q: 日本のユースチームがフランスのユースチームに勝利するには、どうしたら良いと思いますか？

A: パワー面を鍛えるべき。しかし、日本は技術もあるし、フランスと同じくらいのサッカーレベルの国ではないのか。

Q: 日本とフランスの指導者の違いはどのあたりにありますか？

A: 日本の指導者は、選手個別にいう指示が少ない。メンタル面などもっと個を見るべきではないか。モチベーションを上げるために与える言葉が少ない。日本の指導者はたくさん走らせる。イジメに近いほど。特にあの夏の暑さでもね（苦笑）
大分は練習時間が長い。フランスよりも1時間長い。でも、悪いとは思っていない。

Q: ジブさんに質問します。ACBBのU19監督も務めていますが、どのようなサッカーをめざしていますか？

A: 現在、私が監督をしているチームは、全国リーグに行く可能性がある。4・2・3・1で戦っている。選手個人をハイレベルなところまで育成したい。人間教育（あいさつ、礼儀）も力を入れている。勝つための手段を教えている。

Q: ジブさんのチームの課題は？

A: 足りないのは、モチベーションかな。現在、リーグで首位のため引き分けでもOKというメンタルが、納得いかない。私が描く良いサッカーは、パスをつなげて良い攻撃の準備をする。組織で戦っているかどうか。

Q: 普段のトレーニングは？

A: W-UP 15分 技術練習 20分、技術+戦術 20分、ゲームという感じかな。
月曜日は主にクールダウン、水曜日はフィジカル面を主に、金曜日は戦術面を中心に行っている。

Q: 週3回は少ないと感じないですか？

A: 練習回数を増やしたいが、学校の終わりが遅いとか1時間かかるところから通っている選手もいるので、週3回が現実的であると思う。

Q: タクミさんは、大分ユースの時に高校チームと試合をしたことがあると思いますが、どんな印象を持ちましたか？

A: レベルが高いことに驚いた。フランスの高校チームは弱いから。

Q: ジギブさんに、どうしたら良い選手が育ちますか？

A: サッカー脳を使える選手かな。メンタルな要素（判断力）、考えられる力ある選手がきつとうまくなる。あとは、気力（絶対にプロになってやっている気持ち）、ハングリー精神かな。貧乏な家庭の選手はうまくなっていると思う。

Q: お金持ちの選手をうまくするためにはどうしますか？

A: うーん。その選手に話をして、君は良いスパイクを履けて幸せだナーという感じでね。

Q: 選手の判断を促すためのトレーニングはしているのですか？選手への問いかけはどんな感じですか？

A: 判断力を求めるトレーニングを組み込んでいる。フリーズして、今こうすればいいだろう？あそこに戻れ！！ということを行っている。

Q: それは教え込むということですね？

A: そうだ。週3回だから、効率を求めている。

Q: 頭を使わない選手が育ちませんか？

A: 確かに。繰り返すが、週3回であまり時間が取れないな（苦笑）

■ディオメドさん(ディオメドアカデミー代表)特別講義 3月25日(月)

1998年フランスW杯優勝メンバーの1人でもある氏にお話を聞いた。小柄ではあるが現役当時、スピードをいかしたサイドプレーヤーで活躍をされた。短時間(15分)であったが、真摯な受け答えをしてくれ、元フランス代表さらにW杯優勝メンバーの威厳を感じ取れた。



Q: 私たち指導者になにかアドバイスをいただけますか。

A: 指導者は情熱が必要だ。私自身は、オセールというプロクラブでプレーしていたが当時の監督であるギルーに多くのことを教えられた。彼はお父さんのような人物で、サッカーの指導者を越えた人であった。

指導者は、選手のことを良く知らなければいけない。例えば、選手が結婚し、子どもが生まれ夜泣きがひどく、あまり眠れない日々が続いているかもしれない。そういうことを知らないと、選手を管理できない。プロ選手も育成の選手も指導する上では、上記は不易なことだ。育成段階の指導者も選手の保護者からのプレッシャーもあるので、選手を良く知らないと。重要なことは、指導者は指導者自身の長所、短所を知ること。そして、指導者自身が自分を知ること。それがスタートだと考える。

日本は日本なりのオリジナルな指導方法があるはずだ。フランスの指導方法を良い面を盗めば良いが、文化や国民性が違うので、そのままそっくりコピーすることはできない。フランスの選手は、ベンチスタートになれば文句をいう民族だが、プレミアリーグの選手は文句をいわなかった。そこに教育や環境の意味があると考えます。

また、共同生活の上で選手にルールを教えることも重要だ。組織としての振る舞いを教えないといけない。

Q: 今日の試合で、あなたの選手がファールをしたら静岡の選手に謝っていました。それも指導しているのですか？

A: 教えています。もっと指導したいけれど。ゲームに勝利はしたいけれど勝利できなくても、フェアプレーの賞だけでももらえれば嬉しいよ。

Q: あなたはどのように、フランス代表になるほどの選手になったのですか？

A: 幼少時から、自分はひとよりサッカーが優れていると思ったが、謙虚な姿勢を持ち続けた。練習に真面目に打ち込んだことが一番だと思う。私は7歳からサッカーをはじめ、12歳からはサッカーを優先できる学校に進み、14歳からオセールの育成組織に入り、18歳でプロ契約を果たした。良い指導者に恵まれたことも要因だろう。私が彼らから教わったことを、今の選手にも伝えたいと思う。

Q: オセールはあなたが活躍をしている時、日本でも有名な育成クラブだった。その秘訣を具体的に教えてください。

A: 現在、リヨンもそうだがユースからプロまで、同じサッカーを目指すことは重要だ。同じ考え、同じ戦術を教え込んで育成する。長期的視点で各クラブの指導者は考えるべきだ。

■クロード・ロバン氏(トロアクラブ育成センター長) 3月27日(水)

俳優かのような風貌で、ジェントルマンであった。質問にも明確に、わかりやすく答えてくれた。このクラブがより育成クラブとして大成することに情熱を持っていることがヒシヒシ感じた。



Q: トロアでは監督のサッカーが、クラブのビジョンになると先ほど説明されましたが、今一度、具体的にお聞きしたい。クラブにビジョンがあって監督を選ぶのか？異なるビジョンを持った監督がきたら、クラブのビジョンが変わるのか？

A: トロアにはビジョンがある。そのクラブにあった監督を候補者の中から選ぶ。トロアの監督は6年間で4人変わった。現在の監督は4年契約をしており、その監督は1990年代にも数年トロアの監督をしていた。よって、先ずクラブのビジョンありきだと考えている。

Q: トロアのビジョンとは何ですか？トロアで活躍をされていたプロ選手が、スタッフとしてそのまま残るとクラブのビジョンがチームに反映されやすいと考えますが・・・。

A: 1.良い人間を育てる。良い選手を育てる。2.良い選手を育て、他のクラブへ高く売る。現在、フランス代表で活躍するマチュビジュは7億円で売ることができた。トロアの育成では毎年、4人1人プロになっている。この25%という数字は、かなり高い数字であると考えている。この数字の高さがトロアの強みだと思う。3.若い選手を、積極的に試合に出場させることもクラブの方針であると考えている。

Q: 選手の発掘、選手の人間教育、サッカー教育がとてもバランス良くトロアでは行っているということですね？

A: そうだと考えている。トロアの育成センターは成長している。しかし、トップのリーグでの成績が育成への予算にも影響を与えてはいるが（現在下位に低迷）・・・。

Q: トロアの育成における課題はありますか？

A: 選手一人一人のメンタルケアなど、個人への投資がまだ少ないと感じている。

Q: 実際、トロアの育成ではどのようなメニューでトレーニングをしていますか？

A: ゲーム形式、つまりサッカーをやらせること。そう世界のトレーニングメニューと大差はないと思うが・・・。

Q: トレーニングメニューは、その年代のコーチに任せているということですか？

A: 1つのメニューを与え、それからはそれぞれのコーチに任せている。ゲームの中で、様々なシチュエーションでコーチ自身の判断がある。やはり、ゲームの中で試合勘など学ぶべきであると思う。

ゲームは11対11を指すのではなく、半面ピッチの7対7や、ダブルボックスの4対4を頻繁に行う。

■ジェラルド・プレシア(INF育成センター統括責任者) 3月28日(木)

背が高く身体は細くスラッとした体格であった。また鋭い眼光で、少し初対面で会うと緊張感を覚えるような威厳のあるセンター長であった。ただ、時折見せる笑顔は人なつっこく、討論の最後にINFのTシャツをプレゼントしてくれた。→今日は機嫌が悪いのかなというふう感じた。ピリピリした雰囲気・・・。



Q: INFの概要について、お話をいただけますか。

A: 選考会に来るのは、13歳の選手。2,000人～2,500人来る。4ヶ月選考会をし、最終的には25人に絞られる。つまり、50人の男子選手、並行して16、17歳の女子選手もここINFにいる。

この育成センターで2年間過ごし、プロクラブの育成センターへ送ることが目的だ。良いサッカー選手を育てることは前提であり、さらに人間教育を重要視している。学校に行かせるなど教育にも力を入れている。一番の目的は卒業後に、人間的に立派であるということが最も重要だ。

概要は1週間の内、月～金まで基本的に過ごす。金曜日の夜に選手それぞれの実家に戻り、日曜日の夜にINFに戻ってくる。

彼らは朝、8:15に出発し、15:00まで隣町のランブイエ市の学校で過ごす。16:15～から日々2時間トレーニングを行う。その後食事をしシャワーを浴び、20:00～22:00の間、勉強をする。成績が芳しくない者は家庭教師も付けている。22:30には消灯し就寝。

Q: 育成センターのチーム(15～17歳のチーム)を、フランス協会は持っていないのですか?

A: 1972年に、INFが作られた。ユースチームはじめはあった。目的は、その当時プロクラブの育成センターがなかったからだ。よって、プロクラブの手本、見本として協会が立ち上げたのが、INFだ。しかし、時が流れプロクラブに育成センター(15～17歳のチーム)ができたので、日本でいうアカデミー福島のようなユース年代の育成センターは役目を終えたと思っている。つまり、15～17歳のチームは存在しない。よって、次はプレ育成(13～15歳)が大事だとプロクラブに示すために、今はプレ育成(INFでは13歳14歳)に力を注いでいる。

育成で大切なことは、より下の年代(6～12歳)でもあると考えている。しかし、フランス協会は12歳以下の育成センターをもっていない。その年代の指導者はボランティアでもあるし、あまり力を入れて指導していない。それがフランスサッカーの弱み。この年代が最も大事なのに!!逆に日本はどうですか?

(研修員)「日本でもプロフェッショナルの指導者は少ない。特に6歳～12歳までの年代の指導者は、なかなかサッカーの指導だけで生計が立てられないのが実情であるというのが、理由の1つです。」

日本は、スポーツをする時間がありますか?フランスは、小・中・高校と学校ではあまりスポーツに力をいれていない、日本はどうですか?

(研修員)「日本も学習塾などに行く子どもも多いので、サッカーをする時間はあまりないと思います。」

Q: 将来、INFでのプレ育成(13～15歳)はどうなりますか?より下の年代に行くのですか?それとも縮小していくのですか?あるいは消えていくのですか?

A: 一番の重要なことは、プロクラブの育成と連携を高めなければならないと考えている。近年、プロクラブはプレ育成の重要性を認識してきた。よってINFに頼ることをし

てきた。しかし、統計的に選手の排出は半々であり、独自の選手をプロクラブも育成しようとしている。

プロクラブとINFは、ライバルと思われがちだが、お互いが良い選手を育成することがフランスサッカーの発展につながる。選手が、プロクラブの育成センターかINFの育成センターのどちらかで育ったのかということはあまり大きな問題でないと個人的には考えている。

Q: 週末、公式戦をINFの選手はINFのチームとして行わない。つまり、大会には参加しない。それは問題ではないのですか？

A: 個人的には、とても大きな問題だと思う。

なぜなら、トレーニングの成果が公式戦だ。ゲームだ。それが、サッカーの醍醐味であるし、舞台であるから。また、選手は所属するチームでINFの指導とは違う指導を週末うける。これでは果たしてトレーニングの意味があるのかと考えてしまう。やはり、INFのチームとして試合をしないといけないと考えている。

Q: その点に関してジレンマがあるということですね？

A: 確かにある。やはり、ゲームでは戦術面、メンタル面の指導が練習よりもできる。トレーニングはしてもチームとしてゲームを行えないことはジレンマだよ。また、フランスは教育力があまり高くはないから、学校で悪いことをしたら試合に出場させないような罰（指導）も行えないし……。これは、悔しい。日本では、規律など指導をする必要が少なくないと聞いているが……。

Q: どのような選考基準で選手を選考するのですか？こういう選手がうまくなるというのはわかるのですか？

A: 個人技術、組織的技術があること。いかにゲームの中で、早い判断できるのかを見ている。

個人技術は、動き、ボールさばき、ゲームを読む力、戦術要素（正しい判断、正しいポジション）、メンタル（堂々とプレーすること、自分の負の感情を抑えること）、身体能力（一番優先順位は低い）

Q: ゲームを読む力や正しい判断を選手に教えることはとても難しいと思いますが？

A: すべて教えられる。しかし確かに難しい。でも、私は20数年指導経験があるので、今は教えられる。例えば、ゲームを読むためには多くの情報が必要。だから、良いポジションを取る。攻めるゴールに背を向けている選手がいたならば、良い角度のポジションを保つこと。これでゲームは読める。

INFでの練習でもポジションと身体の向きはやっている。試合には、今行った要素がまとまっているはずだ。私は彼らが正しいポジションを取るために徹底的に教えている。だから、ゲーム形式のトレーニングをするのだ。自動的になるまで、できるまで教え込む。これは大切なこと。

また、サッカーの情報は、仲間からの声を耳で聞くこと、手で触ること、そして、見ること。この3つだ。指導者は、選手に様々な知識を教え、選手自身も自分たちで考えること。

指導者は、同じことを繰り返し言い続ける必要がある。選手は、情報を得ることがいかに大事なのかを自覚しないといけない。つまり、今までの経験の中で、成功した選手は人の言葉を聞く姿勢があった。その努力は凄かった。いくら言ってもわからない、理解しようとしなかった選手は一人も成功しなかった。

Q: コーチングの部分も大事にしているということですね？

A: 指導者は、知識を伝える術をもっているのが大前提。また自分の見解では、良い指導

者は、答えを教えるコーチではなく、良い発問ができるコーチ。これが良いコーチの定義。解決策は選手が見つけるもの。見つけた選手は、指導者から教え込まれるよりも成長するからだ。

Q: この20年間、フランスで育成をされてきて、子どもたちの変化は感じますか？

A: 昔は、選手に技術を求めてきた。しかし、今私が校長になってからはメンタルを重要視している。

Q: それは、サッカーだけですか？生活面でもですか？

A: メンタル面は意識の持たせ方。若い選手は、あのような選手になって贅沢な暮らしをしたい、お金もちになりたい、女にモテたいではなく、良いサッカー選手になりたいというメンタリティが大切。そのメンタル面を強く言っている。今の若い選手は少し欠けている。また、フランスは離婚率が高い。よって、家族の愛情が希薄になり、メンタル的に不安定な選手が多いのが事実。社会問題にもなっているぐらいだ。

またここは、フランス協会であるから、フランス代表、レ・ブルーの誇りを持たせる教育もしている。

Q: INFの練習では良いサッカーを目指しているはずですが、つまり、ボールを支配し、試合を支配するような。しかし、INFの選手は週末、自分のチームに戻る。その試合で相手の力によって、戦術は変えているかもしれない？ブロックを作る、カウンターを狙うなど。それに対して、矛盾がありませんか？

A: その通りだ。だから、毎年、INFに来ている選手が所属しているチームの監督を呼んで、INFではこのような練習をしていると説明をしている。

Q: 育成年代では、勝つことに集中したゲームをさせる(カウンター狙い)こともいいのではないですか？

A: ノン！育成年代では、試合で勝つ義務はない。選手の義務は良いプレーをすること、これが義務。技術を教えておけば、どのようなサッカーにも将来対応できるから。プロ意識を持たせ、しっかり戦える選手を育成することだ。この年代では今、勝つ必要はない。未来で勝てば良い。

Q: パスを教えるポイントは？(自分のチームでパスミスが多いので・・・)

A: 球技ではパスは重要。選手は、パスは簡単であると勘違いしている。できていないのにうまいと思っている。だからまず、そのことを自覚させる。

メンタル面では、パスを出すのを楽しいと教えること。パスは2人での連携であるということ伝える。パスは、強くボールに足を当てる。正しいお手本を指導者自身が行う。次は、動きながらパス練習を教える。パスは難しい、簡単ではないという意識を選手自身に納得させることが出発だ。

まとめ・作成 大石知宏
編集・校正 池谷 孝

IV. レクチャー

各氏から受けたレクチャーのまとめです。インタビューと少し重複するところもありますが、ビジョンやデータからサッカーを俯瞰してください。

1. ベルトラン・ルゾーさん(パリ・サンジェルマン FC 育成責任者)とのディスカッション

■目的:

カタル人の会長が就任し、ヨーロッパで躍進している TOP クラブの育成について知るとともに、TOP クラブから学べるものを考える。

■分析対象:

- ・パリ・サンジェルマン FC 育成センターについて
- ・イル・ド・フランス地域圏のカン・デ・ロージュにある練習施設
- ・U-17 リーグ戦 PSG vs MONDEVILLE

■報告対象者:

県内のすべての指導者

■クラブの育成センターの概況:

- ・育成は、チーム総予算の5~10%(約 5 億円)で運営されている。
- ・育成部門では、フランス国内で 8 番目の予算。
 - これは敷地内でできる範囲で行なっているため。
- しかし、育成センターであるカン・デ・ロージュはフランスサッカー連盟によってフランス最高水準の練習施設のひとつと認識されており、2009 年にエリートクラスに分類された。
- ・施設内には、クラブハウス・天然芝グラウンド 1 面・人工芝グラウンド 3 面・陸上競技場、ビーチサッカー 1 面・ホッケーグラウンド 2 面など
- ・エリート育成担当スタッフは35人。
- ・クレールフォンテーヌの INF には、
 - パリ・サンジェルマンからは行っていない。
 - 直接の試合もここ数年していない。
 - 毎年1~2名の選手をとりあう。
- ・エリート部門とアマチュア部門に分かれる。



エリート部門

▶プレ育成(13・14 歳)

U-14・U-15 16 名ずつの 32 名 交通費などで年間3000ユーロ支給される。

▶育成(15 歳以降)

U-17・U-19・CFA(4 部) サテライト U-17 では月 500~1,000 ユーロ支給される。

U-17 はイル・ド・フランス地方(パリ近郊)のリーグ戦参加。20人ぐらいのチーム。

U-19・サテライトは、UEFA チャンピオンズリーグができる予定。

プレ育成から、育成に昇格できるのは10名程度である。昇格が無理でも(TOP クラブがゆえに)他のプロクラブへ行く事ができる。

最終的に2名ぐらいがプロ契約。6名ぐらいが他チームでプロ契約。

U-14/15 はグラウンドから 30 分離れた寮で生活。学校にかよっているが、先生が寮に教えに来ることもある。

U-14 は、リーグ戦には参加していない。 → 同地区のリーグでは、大差で勝利するから。
週 5 回 TR 2 週に1回プロ組織とゲーム。

アマチュア部門

621名在籍 女子145名

U-11 まではスクールとして活動。会費は年間 25,000 円程度。 → ビジネスではない。
昨年、プレ育成に4名昇格。TOP チームを作らないのは、保護者対応が大変。(日本と同じである。)
U-17 まで年代別でチームがある。まれに、1~2名エリートに昇格することがある。
シニアチームもある。(見学当日もチームのユニフォームを着てゲームを行っていた。)

■週間スケジュール

育成

	月	火	水	木	金	土	日
AM	○	○	○			ゲーム	ゲーム
PM		○		○	○		

プレ育成

	月	火	水	木	金	土	日
AM	授業	授業	授業	授業	授業	ゲーム	ゲーム
PM	○	○	○	○	○		

※水曜日に U-14 はゲームが入る場合がある。

■育成方針:

- ・知的能力の向上
- ・組織でプレイする → 共同生活することで高める
- ・個の能力もだせる → 組織で消せない能力を伸ばす
- ・クラブのイメージ・ブランド力を持つ
- ・ビデオ分析や能力をデータで管理する → 成長を観るためのシステム

■システム・戦術:

U-16

- ・ポゼッションサッカーをする
 - ・効率のよいサッカーをする(ゴールという目的があってポゼッションする)
 - ・DF は4バックでゾーンディフェンス
- トレーニングから意識させる。効率の良い練習を行う。

U-13/14

- ・個人能力・戦術 → 3つのレベルに分けたテストがある。
 - レベル1 止まってリフティングなど 12 種類
 - レベル2 動きの中でリフティングなど
 - レベル3 コントロール・パス
- ・コーディネーション
- ・2 時間のトレーニングで、はじめの 30 分は技術を磨く。

■フィジカル:

器具はあまり使わない。ボールを使う。砂の上を走る。
フィジカルコーチ 5 名が練習の前後に行く。

■トピックス(U-17 のリーグ戦のゲームを見て)

- ・やはり他チームとの差は歴然であった。(相手チームのモチベーションは高かったが…)
- ・選手達の質を見ると、身体能力に優れたアフリカ系の選手が多かった。
- ・フィニッシュには課題があったが、ゴールへの目的を持っていた。

報告者： 村下 和之 (沼津西高校)

2. フランス代表U18代表監督フィリップ・ベルジェロさんとのディスカッション

- 講師：フィリップ・ベルジェロ氏 (U18 フランス代表監督)
- 分析対象：U18 フランス代表チーム
- 報告対象者：2種から4種までの指導者
- 目的：U18 フランス代表のチーム作りと世界のトレンドを知り、自チームのチーム作りに活かすと共に、静岡型育成ビジョンを考察する。

●U18 フランス代表プロジェクト

<目標>

ヨーロッパ選手権で勝つこと

<選手選考基準>

- ①ヨーロッパで活躍できるか (技術的にハイレベルなプレーヤー)
- ②選手のモチベーションの高さ (態度や人間性の悪い選手は選ばない)
- ③国際試合 (他国の色んなサッカーに触れる) でのプレーの質

<チームのシステム>

基本：4-4-2 *展開によって3-5-2 (特にリードされている場合)

理由：①ピッチの配置に無駄が無く、バランスが取れていること。

②選手が4-4-2で練習して慣れていること。

③8人の2ラインで守れること。

④相手2人のセンターDFに対して2人のFWは効果的である。

<1年通したテーマ>

～ 組織でプレーすること ～

- ①ゾーンディフェンス
- ②中盤でボールをしっかり奪う
- ③ボールをキープして前線に進む
- ④カウンター攻撃
- ⑤ゴール前のプレー
- ⑥切り替え (どう動くか)
- ⑦セットプレー

●U18 フランス代表トレーニングメニュー

<ゾーンディフェンス> (ドイツなど強い相手を想定したメニュー)

・4 (DF白) 対6 (オフェンス青)

発展

- ・ 6 (4 DF、2 ボランチ) 対 6 (OF)
- ・ 8 (4 DF、4 MF) 対 8 (OF)
- ・ 10 対 10
- ・ ゲーム形式のトレーニングへ

- * 連動した守備 (ボールサイドへ)
- * MF との連携
- * FW のコースを切る動き



<攻守の切り替え>

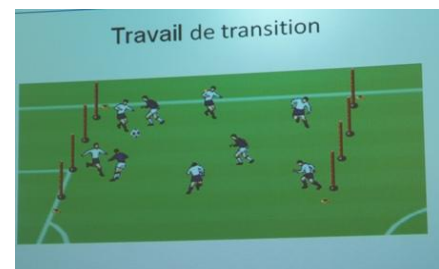
- ・ 6 (赤、白) 対 3 (黄色)

- * オフェンス (赤、白) サイドをうまく使いながら逆サイドにボールを運ぶ。奪われたら守備になる。
- * DF (黄色) は上下にあるゾーンに一人だけ入れる。ボールを奪ったらオフェンスになる。
- * オフェンスのタッチ制限あり



- ・ 6 (OF白) 対 3 (DF青)

- * OF白はボールポゼッションし、奪われたら4つのゴールを守りながら奪い返す。
- * DF青はボールを奪い4つのゴールを目指す。



- ・ ゲーム 6 (白) 対 6 (青) + 6 フリーマン (黄)
(5分ゲーム)

- * 攻撃はフリーマンを使いながら数的優位を活かす。
- * フリーマン黄: 2人中、4人両サイド



<ポゼッション>

- ・ 8 対 8 のキープ

- * 拡がり意識してサイドのスペースを使う。
- * ポジションを意識したパスワーク。サイドはサイドDF・MF、中央はセンターDF・ボランチ、FWなどをイメージする。
- * サイドのゾーンにオフェンス側のプレイヤーが



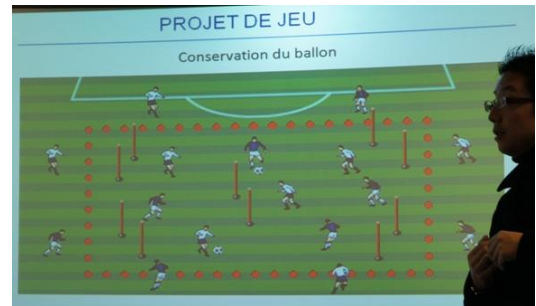
一人入れる。DFは入れない。

発展

- * サイドのゾーンにオフense 2人、DF 1人入れる。
- * 点線の外にオフense側 1人でられる。
(センターDF、FWのイメージ)

・ 8対8 (中4対4 + 外フリーマン8)

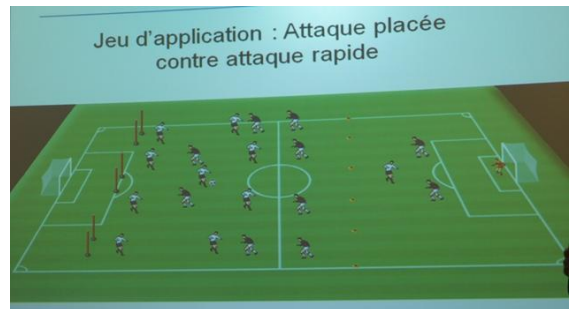
- * 外をうまく使い、相手を揺さぶりながらキープし、ミニゴールの門を通す。
- * 始めは攻防せず、各チームでパス交換。
中と外の選手が入れ替わる。
- * 攻防ではボールを門に通すこと、門に通して味方に渡すなど難易度を上げていく。



<カウンター攻撃>

・ 10対10+GK

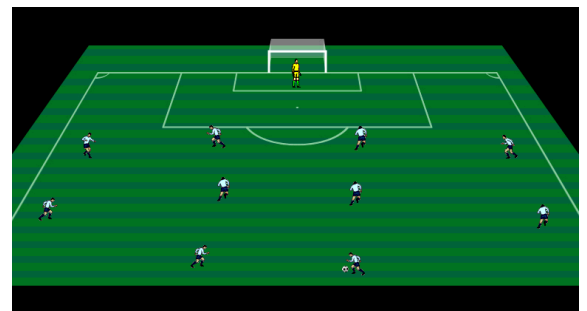
- * 白はリトリートからボールを奪ってフロントコートにパスし、フロントコートへ二人サポートして3対2の状況で攻める。
(二人のサポート指定あり)
- * 青はポジションしながら、3つのゴール通過を目指す。
- * 15分ゲーム×2



<ゴール前の攻撃>

・ 組立からフィニッシュ

- * 4-4-2のフォーメーション、
DFなしの状況で組み立て、サイド攻撃、
フィニッシュまで行う。
- * DFのオーバーラップなどバリエーションを増やす。
- * 試合前日に行うトレーニング



<セットプレー>

・ コーナーキック

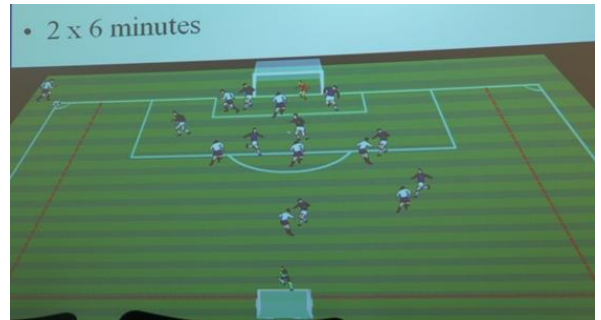
- * ポジションの配置を決め、そこから各種



パターンを 決める。

・セットプレーゲーム(8 対 8+GK)

- * 50Mのコート、6分1セット
- * ゲーム形式に中で意図的にセットプレーを与える。



● Q & A

Q：どれだけ年間活動しているか。

A：それほど活動しておらず、活動時間が少ないことに問題を抱えている。

Q：どんなことに重点を置いて活動しているか。

A：組織力の向上（チーム一丸）を重点においている。ワールドカップの南アフリカ大会の問題など近年、若者の態度や人間性に問題を抱えているため教育力に力を入れている。また、栄養学にも力を入れ、体脂肪 12%以上の選手を選考しない。

Q：選手選考基準のハイレベルな選手とは。

A：技術はもちろん、メンタル、フィジカルに優れていてクリエイティブな選手。
(具体的な例として守備では監督の指示通り動いてボールを奪い、攻撃では状況によっては監督の指示を無視して自由にプレーできる選手を挙げていた。)

Q：U18フランス代表の中にINFサッカー学院の出身選手は何人いるか。

A：3人（18人中）

Q：代表選手をどのようにコントロールして引っ張って、トレーニングしているか。

- A：①カウンセラーとの連携から各選手の人間性などの情報を知り、指導に役立てる。
(代表活動の最初に、ストレス・モチベーション・人間性に関する3つのテストを行い、個人データをとって指導に活かす。)
- ②監督・コーチの目でチームリーダーや影響力のある選手を見つけ、指導に活かす。
(移動のバスの中などのピッチ外での振る舞いも参考にする)
- ③共同生活の中にルールを決めて、規律ある集団にする。
(外出禁止、遅刻者罰金などのルールを決めるがコーチも同様であり、コーチは見本を示す)
- ④選手とのコミュニケーションを大切にする。
(若者世代を知ることや時には冗談が言えることも大切である。)

Q：フランスでは、現在メンタリティーの部分を重要視しているが、強いメンタリティーを持ったとしたら、今後はどのようなことが課題として挙げられるか。

- A：①ゲームを支配する知的さ。
②交代選手のクオリティー（世代にもよるがU18はトッププレイヤーが8人ぐらいしかいない。ドイツの方が、選手層が厚いと認識している）

Q：コーチについて（教え込む・引き出すなど）

- A：①選手のクリエイティブなものを引き出してあげること。
②選手は努力することが大切であって、コーチは試合の失敗（内容・勝敗）を許してあげること。ただし、コーチやチームメートを裏切る選手は許さない。
③コーチは勝っても負けても、自分自身が変わってはいけない。コーチが見本となり、

行動で示すことが重要である。

報告者：増田 裕（コーチングスクールマスター）

3. ジル・ビブ氏 (ACBB育成統括)、タクミ・ジャナ氏とのディスカッション

■分析対象:

A.C.B.B (アマチュアクラブ)

ジル・ビブ氏 (14歳からシニアまでの育成部長兼U-19監督)

タクミ・ジャナ氏 (U-19選手、元大分トリニータユース在籍)

■クラブ概要

育成クラブとしてはフランスで2番目に大きなクラブである。

【構成】6歳～46歳までの1,200人が所属。

内訳) 6～12歳 450人 13～46歳 500人

残りの250人が指導者及びボランティア

【日本との関わり】約70人の日本人が所属。日本人だけのチームもある。

日本とのパートナーシップも結んでおり、来年は2.3人の学生が語学留学も兼ねてACBBでプレーすることも決定している。

【会費】年間200ユーロ

【ウェア】支給

【グラウンド】ホームグラウンドとしての所有は無く、市がクラブのために施設を借りて無償で提供してくれている。

但しフルコートの半面で全カテゴリーが使用している状況。試合の時なども市がグラウンドを確保し無償で使用させてもらっている。

グラウンドはクラブにとっても1番の問題である。

【試合形態】各カテゴリーにおいてフランス連盟の規定より1人増やして試合をしている。

6歳は5人制、7歳は6人制、8歳は7人制、9歳は8人制、10歳・11歳は9人制
12歳から11人制で行っている。(オフィシャルゲームはできないため、独自で練習試合を行う)

※1人増やす事の理由・・・「選手の目標をハイレベルにし、1人増やす事で難しい状況にするため」

【練習回数】

・10歳から12歳は週2.3回の練習+公式戦。

・各年代A.B.C.Dの4グループに分かれ、Aは室内で1回、外で1回の練習、練習試合で計3回。B.C.Dグループは週1回の練習+試合。

※指導者のミーティングで選手の入れ替えは常に行っている。

【選手の構成】

・毎年このクラブからINF(クレールフォンテーヌ)に1～2人が合格して、今年は最終選考に2人が残っている。

・サッカースクールからAチームに入ることは少ないが、Aチームをトップクラスに残すために、毎年U-13、14年代に各10人を外部のクラブ(ブローニュを中心に半径60Km以内)から補強をしている。

・特にスカウトがいるわけではなく、ジル氏の人脈でプロクラブから残れなかった選手などを紹介してもらっている。

【指導体制】

- ・このクラブにはこういうサッカーを目指すという理念はなく各年代の指導者（監督）の意向（思考）でサッカーをしている。
- ・基本的に指導に関しては、各年代の監督に任せている。
- ・9歳からは同じコーチが指導にあたる。
- ・ライセンスはみんな持っている。（日本のC級以上）
- ・いい選手を連れてきても監督やシステムと合わないこともある。

【指導者の選び方】

ジル氏がこのクラブのビジョンにあったコーチを連れてくるのではない。
さらにアマチュアクラブのため、哲学を持ったしっかりとした監督で方針に従うという存在になると費用がかかるので、それはできない。

*U-17の監督のミカエル氏はA級で、今回静岡県選抜のコーチをしてくれた方です。

■日本とフランスの違い

両国の指導者を知るタクミ氏に指導の違いを聞いた

- ①日本の指導者はメンタル面に気をかけない
 - ②ボールを扱う技術の事はすごく言う。
 - ③出る言葉は、ちゃんとプレーしろ、がんばれという言葉が多い。
 - ④一方フランスの指導者は勝ち気を植え付けることに重点を置いている。
 - ⑤練習時間は日本の方が長い。（トリニータでは2時間30分から3時間くらい）
- 小学生は走らされる量がいじめに近い。子供からしたら苦痛じゃないかと思った。フランスにいた時から一気に時間が増えたので最初はフランスの方が良かったけど、自分なりに成長しているなど実感して逆に日本の方が良いのかなと思ったそうだ。

■U-19の現状・・・ジル氏に聞いた

- 目標・・・①パリの地方リーグを首位で終わらせること（1位だけが全国リーグに進めるため）システムは4-2-3-1が基本。
- ②選手個人をハイレベルに育てる事。
（優秀な選手は大人のチームでプレーさせている）
- 選手への要求はまず、彼らはサッカー選手の前にしっかりとした人間でいられることを教えている。外部から来る選手にも、あいさつ、礼儀正しさを重点的に教えている。
- 全国リーグへ向けて、モチベーションから始まり勝ちに行く。勝つためには時と場合には選手に怒ることも必要。
- 試合に勝つためには何かを犠牲にすることもあると言っていた。
- 選手は首位にいて満足しているところがあり、1試合くらい引き分けでも良いくらいの気持ちになっていることがある。気力が足りないのもっとモチベーションの高さが欲しい。

■良いサッカーとは・・・～ジル氏の考える良いサッカーとは～

- 組織でしっかりサッカーが出来ること。ただ前に蹴るだけではなくてパスをつないでしっかりゲームを作る。
- 前に行くためには攻撃の準備をしっかりすること

■良いサッカー選手の条件

- 早ければ早いほど（幼い時に）技術を身につけさせる。
- 頭を使える選手であり、メンタルの強さ、考えられる力、判断力という要素をもっている。
- 知的さが重要。

■メンタル

フランスのプロ選手は70%~80%が貧しい所の出身である。
貧しい所出身の選手はプロになるという気力・努力がすごく強いのに、裕福な家庭の子はサッカーに失敗しても生活に困らないという気持ちがある。それは良くない。

■トレーニングの組み立て

W-up — 技術 — 技術・戦術 — ゲーム
15~20 15~20 15~20 30~45

●月・水・金の週3回の練習で月曜はクールダウンを中心に、水曜はフィジカルと戦術、金曜は試合に向けた戦術が基本となり、フィジカルが3週置きのサイクルで高めていく。理想は週4回の練習を行いたい为学校が終わるのが遅いのと、通うのに1時間かかるためにできないのが現実。

●練習日が3日しかないため、効率を求めて、練習のゲームの中で止めて監督が指示を出す事は良くある。問いかけて選手たちに考えさせるよりも監督が答えを教えるコーチングよりティーチングが多くなるのは練習日が3日しかないので、どうしても急いで答えをださなければならないと強調していた。

■感想

フランスでは行政が積極的にクラブチームにグラウンドを提供していることに大変驚いた。グラウンド確保はクラブが一番苦労するところだが、行政のバックアップにより育成が保たれることは、将来のサッカー底辺の拡大、サッカーエリートの育成・排出へとつながっていくと思う。基本的にはフランスのサッカー指導もボランティアに頼っていることもあり、指導者の質とクラブ経営を守るために国を挙げてのバックアップがなされている。サッカー王国静岡でもそのような体制が取られたら、もっともっとサッカーが拡大するかもしれない。私は願っている。

また、クラブ内に少年から成人までの年齢別カテゴリーが存在することで、クラブの一貫指導体制が取られている。これは上のカテゴリーへ抵抗なく進むことができる体制である。

一方、メンタルにも大変重点を置いている。サッカー選手である前に人間として・大人としての挨拶・礼儀正しさを大切にしている。そして多少の勝利至上主義的思考を感じることもあったが、試合に勝つ気持ちを植え付けることにも重点を置いている。ちゃんとプレーしろ！頑張れ！という言葉ではなく、勝つためにはどんな声掛けが必要なのかについても考えさせられた。

最近では、日本の選手も多く海外で活躍するようになってきた。指導者も自国のサッカーだけでなく、世界を見てしっかりと学習しなければならないと思った。異文化に対する理解も含め、指導者は、国際的な目と感覚を持つことが大事なのだと感じた。今回のフラン

ス指導者研修は私にとって大変刺激となり、改めて外へ出ていくことの大切さを痛感した
報告者:古杉 仁志(4種 ヴィヴァーチェ)

4. クロード・ロバンさん(トロワクラブ育成統括)とのディスカッション

■分析対象:トロワ (リーグ1) のクロード・ロバン (育成センター長)

■施設案内

- ① クラブハウス・・・入口にはテレビ画面により、選手にその日の予定がひと目でわかるように表示されていた。必要に応じて運転手も常に待機。
- ② 選手の部屋・・・皆同じでとてもシンプル。個室。42室。
(ここには15歳から18歳までの育成の選手が生活をしている)
- ③ その他・・・選手用のパソコン部屋、食事を管理する人の部屋、スポーツライセンスを管理する人の部屋、スカウトの部屋、フィジカルコーチの部屋、U-15からU-19サテライトまでのスタッフが同じ部屋。
 - ・クラブに関わる全ての人が合理的に仕事をしている印象を受けた。
 - ・別棟には、食堂・選手のゲームルーム・教室・トレーナールームも完備。
 - ・トレーナーも毎日午前10時に来て選手のコンディションをチェックし、隣にはドクタールームもあり、午後6時30分から7時30分まで毎日来ている。
- ④ グラウンドは人工芝3面、天然芝4面。GK専用コート1面。
プロは使用せずすべてユース(育成センター)だけで使用できる。

■教育活動

授業は先生がこの施設まで来てくれて3~4人の少人数制での授業を行っている。多くても8人で行い、1週間で15時間の授業を受けている。普通は30時間あるものを半分の時間で消化できるのは人数が少ないことで効率を上げているからであるとのこと。1コマが1時間、1日3コマで午前は8時から10時、午後は3時から4時が授業時間と決まっている。12時からは昼食でその後に必ず昼寝が義務付けられている。
また、高校を卒業する国家試験の成功率は86%と非常に高い。フランスでは才能のある子にはスポーツに限らず音楽等でも、かなり待遇面で優遇されているのが実情である。

■育成センター

育成センターがフランスサッカー協会からカテゴリー分けされていて、カテゴリー1が1番上で、このクラブはカテゴリー1Aに評価されている。育成センターランキングではフランスでは7番目。(サッカーの結果のみで評価)

■コンセプト

クラブが1番言いたいことはトップチームからユース(育成センター)との連携をとっても大事にしている。トップチームからユースでも同じようにスクールからトップまで同じコンセプトで行っている。

■コーチ

サッカースクールには4人、プレ育成にはGK・フィジカルコーチ含め5人。
育成エリートにはGK・フィジカルコーチ含め8人。

■TRのスケジュール

- ・U-7.8.9が月・水の週2回。U-11が月・水・金の週3回に試合。
- ・プレ育成はU-12から始まりU-12.13は12人から16人で週4から5回。
- ・U-14.15は14人から16人。週4～5回と地方リーグに参加。
- ・U-16.17は16人から18人。週5回と地方のU-17リーグに参加。
- ・エリートU-17は26人で全国リーグに参加。
- ・エリートグループは28人でU-19全国リーグに参加し、さらに5部リーグにも参加している。
- ・トップチームは24人。リーグ1に所属。

■1日のスケジュール

- 7:00 起床 7:30 までに朝食
- 8:00～10:00 まで授業
- 10:30～12:00 TRか筋トレのグループに分かれる。
- 13:00 までに昼食
- 13:30～14:30 昼寝
- 14:30～16:00 まで授業
- 16:30～18:30 TRか筋トレのグループに分かれる。

■TR

基本的に小さい時から、全てのTRのテーマはゲーム形式にしてやらせている。
内容はコーチ同士の共通のテーマはあるが指導はそれぞれのコーチに任せている。動き方などはゲームの中で選手に教えていく。

現在フランス全体のクラブランキングでは18位。このランキングは過去の結果とプロ選手を何人輩出したかで評価するため、このクラブは86年に創設、育成センター自体は10年の歴史しかないのに18位ということはすごく評価されている。

■監督

クラブのビジョンにあった人を選ぶ。

監督は4つの柱としてバランスを保つことを大事にしている。

- ① 組織でしっかり戦えること
- ② 選手のクリエイティビティを尊重すること
- ③ クラブを長くトップリーグ（1部）にとどまらせること
- ④ 次の試合に必ず勝つこと

■テーマ

テーマとして大事にしていることは、『選手個人としての存在、そのためにしっかりとした教育をすること。子供を大人に育てなければならない。さらにサッカー選手に育てなければならない』と強調していた。

選手を人間として育てることが優先で、次にサッカー選手としてトップチームの監督・

サッカーを理解できる選手を育てる。とにかく優先は第一に選手を育てる。それは予算が沢山あるクラブでなければ出来ないのので良い選手を育てて高く売れば理想。

マテュイディ選手（フランス代表）はここで育てパリ・サンジェルマンから約7億近い金額を移籍により受け取ることができ、これこそが理想的なことである。フランス全国で毎年80人くらいがユースからトップに上がり、当クラブでは4人に1人がプロ契約に至っていることはかなり高い確率である。この統計を維持することはとても大変なことだが、それだけ努力している。そしてパリから遠くないので、パリで漏れた選手がここへ来ることもある。

現在の育成センターは選手の発掘・人間教育・サッカー教育のバランスがとれて、うまく行っている。そして、課題と向上させるところは選手1人1人のメンタル部分をケアすることが必要だ。

■感想

アマチュアクラブとの一番の違いは、学校との関連やハード（グラウンド）に悩まされることなく、育成プログラムを行うことができる点である。

子供たちの受け入れ環境とサッカーを継続させる環境の整備、さらにそれに関わるスタッフの質についても大変なこだわりを感じる。

育成センターに通う選手は基本的には寮生活だが、効率よくトレーニングが行われるよう学校の先生が通って来てくれている。トレーニングだけでなく、学業、生活面でもバランスのとれた環境で生活することができる。優れたプロ選手になるためにはサッカー的能力も重要だが、それと同じくらい勉強の成績も大事である。ゆえに全員が上のカテゴリーを進めるわけではなく挫折を味わう子も出てくる。一見サッカーに偏った思考のもとで生活しているように感じていたが、全く違いトータル的に見ても一人の大人として生活しているような取り組みがされていることは大変素晴らしいことだと改めて感じた。

また、クラブの格付け制度を導入することによってクラブをよりよい環境の整備へ向かわせているが、選手の育成環境・指導者の質を含め、これだけの環境を整えるために多額の費用をかけて育成していることが周知の下になされていることに大変驚かされた。そして昨今の日本とは全く違う点であると痛感した。

個人的には昼食後の昼寝の時間は大変効果的だと思う。日本でも取り入れてくれたらいいと思う。

報告者:古杉 仁志(4種 ヴィヴァーチェ)

5. 国立サッカー学院(I.N.F) クレールフォンテーヌ視察レポート

●目的:フランスサッカーの指導体制を学ぶことにより、今後の静岡の選手育成で目指す方向を探る。

●分析対象:INF U-14

INF概要

INFの育成プロジェクトは①人間を育てる②教育(学力)③サッカー選手を育てることの3つを柱にしている。フランスは貧富の差が激しく、教育をまともに受けられない子どもたちも多い。両親の離婚率も高く、十分な人間教育がされていないのが現状である。サッカー選手である前に、一人の人間であるということを

自覚させるとともに、INF卒業後にプロ選手になることを目指している。

- ・育成コーチライセンス保持者が協会の指導方針にしたがって指導
- ・育成期間はU-13・14の2年間
- ・女子はU-16・17・18
- ・選手選考は13歳で行われ、イルドフランス地方の選手2000～2500人が参加して4ヶ月間の選考期間を経て25名の選手を選考する。

選考基準（こんな選手は良くなる）

- ① コーディネーション
- ② ボールジェスチャー（フィーリング）
- ③ ゲームを読む力・視野の広さ
- ④ 正しい動作を正しい時にできる
- ⑤ メンタル
- ⑥ モチベーション
- ⑦ 身体能力・フィジカル

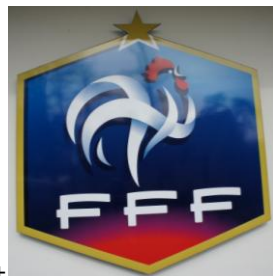
・INFに所属する選手たちは、平日の月～金曜はINFで生活、トレーニングをして、土日は各自が所属しているチームで試合を行う。

月～金曜日の一日の流れ

- 7：00 起床
- 8：15 中学校へ登校
- 15：00 下校
- 16：30 トレーニング
- 19：00 夕食
- 20：00 自主学習（先生がサポートに来る）
- 22：30 就寝

ディスカッション

INF責任者 ジェラルール・プレシア氏



●フランスの課題

U-12以下は真剣な取り組みが甘い。環境面の整備、指導者がプロでない。

●INFの今後の展望

プロチームとの連携を密にしていきたい。INFを利用して自チームを強くしていく事

●質の変化

INFは過去の選手選考や育成は技術に重きを置いてきたが、現在は、技術はもちろんだがメンタル重視に変わった。

●INFの課題

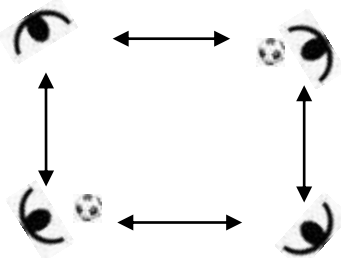
INFで平日にトレーニングをしたことを自チームで生かすことができているか確認ができないこと、チームによっては、指導者の目指すサッカーや戦術が全く違うためにトレーニングが生きないことが多い。そこにINFの指導者も課題があると感じている。

- ゲームを読む力とは
ゲームを読む力は育てることができる。ゲームを読むにはポジショニングを大切にし、情報を多く入れること。情報を入れるのは“目・耳・触る”こと。
- 成功する選手はどんな選手
聞く耳を持っていた。
- 良いコーチング
選手に良い問題を提示したり、発問できたりすること。解決策は選手に考えさせることができる。
- リトリートすることについて
大きな問題である。勝つ術を教えることは育成年代で重要ではない。
『選手には勝つ義務はないが、良いプレーをする義務はある。明日(将来)勝てばよい。』
- パスがうまくなるためには
パスは下手。一番大切である。自分はパスが上手いと勘違いをしている選手が多い。まずは「パスが下手である」ということを自覚させる必要がある。正しいジェスチャー(動作)でしっかりボールに足を当てること。次に、動きの中でプレーさせる。常に2人の連携を大切にさせる。

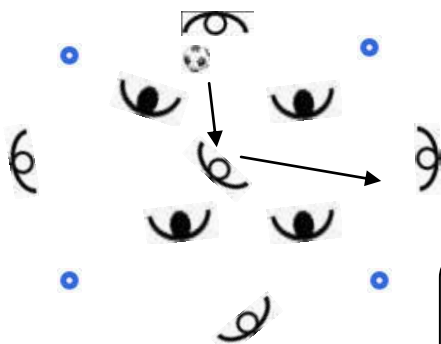
INFのTR

U-14

- ① 2人組パス ・フリー
・バックステップ
- ② パス&コントロール(4人組 ボール2個)足の使い方、体の向き、パススピードまで細かく



- ③ 4vs4+ターゲット



パスの強さ、体の向き、ボールの当て方まで細かくデモンストレーションを入れながら指導していた。ミスに対して強い口調で指導していた。

INFとのゲーム

- U-14の選手たちは25名いるが、試合に出ていた選手の中にはDFは一人。選考段階でFW、MFの選手ばかりでDFはほとんど入らなかった。
- 体格は小さい選手が多かったが、体格差を感じさせないプレー。確実な技術、高い戦術理解と強いメンタル。
- 全員ボールに関わろうとする
- 攻守ともに数的優位を常につくろうとする
- リズムを変えられる選手の存在
- フェイント、タイミング、正確なボールタッチでスピードを落とさずにドリブルできる選手の存在。
- GK(推測身長145cm)が一番声を出して試合に参加していた。
- GKを含め、大きく蹴らないでパスでつなぐ。チャレンジしている。
『選手には勝つ義務はないが、良いプレーをする義務はある。明日(将来)勝てばよい。』

※選考基準と照らし合わせると選手の質の高さは理解できる。トレーニングが試合で再現できていた。

静岡の課題の発見と分析

- フィニッシュの精度の追及
ポゼッションや もっとフィニッシュのTRの割合を増やした方が良い。
- ラストパスの精度の追及
プレッシャーのある中、動きながらのパスの精度が低い。
- 相手との間合い(ボールを奪う時)
“アプローチの速さ”に注目しがちだが、“どこまでアプローチにいけるか”に注目することも大切である。
ディフェンスはボールを奪うことを目的としているのに、せっかく良いポジションをとって、速いアプローチをしてもボールを奪うことができる間合い(距離)がいなければ意味がない。近くにいるだけで、ボールや相手に触れられる距離がいなければプレッシャーになっていない。
ボールホルダーにプレッシャーをかけたり、ボールを奪いにいったりする際の相手との間合い(距離)に差を感じた。ゲームを観ていて、INFの選手は静岡の選手がボールを離したあとに足や体がぶつかる(アフターファールにならない程度)が多かった。裏を返せば、ボールに対して厳しくチャレンジしているということでもある。これがあたりまえの感覚になれば、ボールを奪えるシーンが増えると感じる。この間合い(距離)については、4種年代から厳しく要求していく必要がある。

トピックス

- 選手がイメージしやすい言葉
静岡のTRを担当したミカエル・バレーさんの言葉
ディフェンス時に「味方選手全員が紐でつながれている」と伝えていた。
「連動する」ことをイメージしやすい言葉で伝えた。

振り返り

その国の文化がサッカーにそのまま反映されているということを感じることが出来た。

フランス人は個人主義である。個人が基本で、個人が目標である。サッカーにおいても、個人が基本である。自分の役割を果たせない選手、ミスする選手に対して周りは厳しい。その点、日本では個人に対して甘い気がする。全体主義、グループ活動が得意な日本人は、思いやりや助け合いが良い所である。その反面、全体のことを考えるあまり個に特徴がある選手が出にくい環境なのかも知れない。

本田佳佑のような「俺が、俺が！」という少し自己中心的な選手が多くピッチに立ち、日本人の良さである献身的なプレーを追求すれば…。と言っても、日本人は日本人。フランス人のような個人主義になれないので、指導者は選手個人を尊重し、特徴を消さない指導を心がけて行くことが必要なのかも知れない。

報告者:佐野伸介(浜松市立富塚中学校)

6. ジョン・マルク・ロドルフさん(オードセヌ地域リーグ最高責任者)とのディスカッション

■分析対象:講師: Jean marc Rodolphe (ジョン・マルク・ロドルフさん)

元プロサッカー選手 (GK)

U-20 フランス代表監督

GK プロジェクト指導者

現オードセヌ地域リーグ最高責任者

■選手発掘

○選手選考基準

年齢ごとに分ける

12歳のカテゴリーから始める

クラブと指導者の関係

多くの選考会を実施

優秀な選手に関してカルテを作成してフランス連盟に送る

(技術、身体能力等総合して選考)

U-13で500人程度を選考範囲とし、評価1~3とする(1が最高)

■選手育成に関すること

○プロリーグに所属している選手の50%はプロクラブではなくパリリーグ(地域リーグ)から出ている ⇒ 登録人数が多く競争できる環境であるから

U13でプロクラブに入るとプロ選手になる確率は20%

U14、15でプロクラブに入るとプロ選手になる確率は20%

U16、17でプロクラブに入るとプロ選手になる確率は60%

数字が示す通り、早くからプロに身を置いておいても最終的にプロ選手として活躍できるものは少ない。なるべく長く家庭生活を送ってきた選手の方がプロになっている。

U15までは地域のクラブでやるのが重要であると考えている。(プロクラブに入るには自宅から半径50km以内でなければならない)

○U13~U17の選手に求めるものはメンタリティとインテリジェンス

(昔は技術を重視していた)

・U13の目標は一人でも多くクレールフォンテーヌに入れる選手を育てること、ボールが

来た瞬間に何をするか考えられる選手を作ること。

我々は U13 を最も大切な年代の一つと考えている。体格差があるので判断力を重視し、想像力、インスピレーションを磨くこと。メンタル面の指導も重要視している。

- ・ U14 では地域選抜に入ることのできる選手の育成、U15 ではフランス全土の大会に選抜として参加すること（優秀選手がフランス代表として初めてチームを作る）、U16、U17 では各種大会に参加しながら多くの選手見て代表選考する。

○フランス人は個人主義的である。

今までは組織で何かをしようという教育がされてなかったために個人プレーが多く、チームプレーが苦手である。自分のところにボールが来てからプレーの選択を始める選手や態度の悪い選手が目立つ。スペインのサッカーが評価されているのはチームプレーであり、ピッチ中ではスピードやリズム感あるサッカーが多くオフザボールのときも常に次のことを考えている。

○少人数制サッカー

U9 が 5 人制、U11 が 7 人制、U13 が 9 人制、U15 から 11 人制となる。

パリリーグでは U12、U13 の 8 人制サッカーを目指している。試合時間は 20 分ハーフ（10 分ごとに 2 分の指示タイム）、選手の出場時間を 50%以上確保することとしている。13 歳まではどこのポジションでもできる指導をし、14~15 歳でスペシャリスト育成へ移行する。ただし、GK は U-11 の時から固定する。

7. フィリップ・ベルジェロさん(U-18 フランス代表監督)とのディスカッション

■分析対象:講師：フィリップ・ベルジェロ氏

元フランス代表選手（GK）

U-18 フランス代表監督

フランスコーチ S 級ライセンスインストラクター

■代表選手の選考

○選考基準 ①ヨーロッパでたたかえるかどうか

②選手のやる気、モチベーションが高いかどうか、良い人間性、態度の悪い選手は選ばない。

フランス代表は前回ワールドカップの時の態度の悪さが問題になった。

選手選考の際、それまでは技術を選考基準のトップとしてきたが、それ以降、組織で戦うこと、取り組むことを意識させるよう、メンタル面の強さを育成年代では大事にしている。

○ストレステスト

専門のカウンセラーがいて、①モチベーションの高さ、維持②ストレス③態度の 3 つに関わるテストを行っている。また栄養学に重点を置き、体重管理がなされ、体脂肪率 12% 以上の選手は代表落選となる。

■U18 フランス代表での取り組み

○システム

4-4-2 システムを基本とする。リードされている時や試合展開を見て 3-5-2 に変えることもある。4-4-2 システムはピッチのポジショニングに無駄がなく、守備面では 8 人で守れること、チームの連係をはかるのにはいいシステムと考えている。攻撃面でも 2 人の FW がいることも良い。

○代表合宿で取り組む 8 つのこと

①組織でプレーする②ゾーンディフェンス③中盤でボールを奪う④ボールキープして前に行く⑤組織的な攻撃⑥カウンター⑦ボールを失った時の切り替え⑧セットプレー

○守備重視

『失点しないということは負けないということ』

トレーニングの時から組織的な守備ができるように意識している。

ボールサイドによること、ボールへのアプローチ、一番遠いサイドの選手はダイアゴナルの位置にカバーリング、ボールを奪うことなど。

動きの変化を何度も言って身につけさせる。

■ベルジェロ氏の指導理念

フランスを代表する選手には強いメンタリティが求められる。目標に向かって努力を続けられる選手を育てたい。イカサマやズルは許さない。監督として自分のミスを認め、大人が見本を見せること。監督自らが選手に入っていくこと、クリエイティブな部分は選手の自由にさせている。選手のいいプレーを引き出す指導をしていくこと。最も大事なことは勝っても負けても自分を変えないこと。

報告者:鈴木 啓史(御殿場南)

V. ゲーム分析…静岡選抜の4ゲーム

静岡選抜のゲーム分析も行いました。国体に向けたチーム作りの一歩ですが指導者の方々にもフランスでのゲームを共有していただき、これからの活動をサポートしていただきたいと思います。

1)U-16 静岡県選抜 対 TROYES(1-2)

■目的

国体への強化を目指すU-16 静岡県選抜のゲームを分析することで、U-15年代の課題とこの年代まで身につけさせたい『組織』と『コンディション』について、考察し今後の指導に活かす。

■試合の流れ&全体像

この試合は、チームスタッフ&選手共に難しかったと思う。なぜならば、前日W杯予選をスタジアムで観戦し、ホテル着は深夜1時を回っていた。翌日は朝7:30出発。過酷な日程であった。きっと言い訳する選手は、きっと一人もいないだろうが、やはり『コンディション』の重要性を、私は確認した。

前半から相手FW9番のフィジカル(スピード・接触してもブレない体幹の強さ)に度々突破を許した。その選手に前半に1点を奪われ、後半も代わって投入された18番に再度、得点された。静岡は、10番の効果的なドリブルからのスループアスで小柄なFWが得点をし、反撃に回ったがタイムアップとなり残念ながら敗戦となった。

■静岡の課題と分析

◇選手と選手の距離感の大切さ

U-16 静岡県選抜を指導されたACBBのミカエル・バレー氏は選手と選手の距離は8mが望ましいと表現されていた。しかし、それは相手チームの力、相手の個人個人の力にもよって変化するから、それだけが正解ともいえない。

この試合では、静岡のDFラインとMFの距離が遠く、またパスの受け手、出し手のタイミング、パスを受ける45度の角度の確保が合わず相手のプレスにはまるシーンが目立ってしまった。効率よく相手陣内へ攻め込むためには、選手たちの正しいポジション、正しい身体の向きを含めた、正しいパス(強弱、正確性、上下)が必要であろう。残念ながら11人の正しいポジションが取れず、11人のモビリティが少なく、相手ゴールに効果的に攻め込む回数が少ない試合であった。

◇サッカーは動詞のプレーが基本(考える・走る・見る・蹴る・止る・止まる・奪う、合わせるetc)

この試合の前半は、『考える』『走る』が、あまりできていなかったように感じた。その大きな要因はメンタル的フィジカル的『コンディション』が整っていなかったに尽きるであろう。

しかし、ハーフタイムを挟んでの後半、県選抜の動詞的なプレーが前半よりも活性化されボール支配率も高まっていった。どのような指示がハーフタイムでされたのか定かではないが、きっとメンタル的指示や戦術的指示が含まれていたのだろう。

それにより、選手のプレーが変化したことは監督の力であろう。この試合を通じて、当た

り前のプレーの精度、動詞的プレーの連続性、これがサッカーの基幹であると感じた。

■提言

◇指導者は、サッカー的形容詞を頻繁に選手へ伝えるべき。

例えば、『パスが弱い、強い、低い、高い』『DFラインが高い、低い』『仲間との距離感が近い、遠い』『敵との間合いが、近い、遠い』『判断が遅い』などなど。これは、teachingになるだろうが、この形容詞を選手に教え込むことは育成年代には必須。当然、上記に記した動詞的な動作を選手に求めることは、言うまでもないだろう。

◇相手FWに対して、+1枚が正解か。

もし、バルセロナのメッシのような選手が敵にいたら、どう守るか。現実的な問いではないが、考えさせられた。この試合の相手FWには、突出した個人が存在した。その選手に対するファーストコンタクトが甘く、前を向かれ、スピードを生かした突破を何度も許してしまった。県選抜は、+1枚で守備をしていたが、カバーも残念ながら機能せず、失点をした。

守備の基本戦術として、チャレンジ&カバーという原則がある。それ破壊できる選手が相手にいた場合、小刻みなラインコントロールで相手FWの集中力を拡散すること。また、2枚でボールを奪うという俗に言う『サンド』。マンマーク、試合の中で、選手自身が自分たちで判断、決断することの重要性はもちろんのこと。もし、メッシのような選手が敵にいたら、どう守るのか・・・。

2)U-16 静岡県選抜 対 A.C.B.B アスレチッククラブ・ブローニュ・ピアンクール(4-1)

■目的

国体への強化を目指すU-16 静岡県選抜のゲームを分析することで、U-15年代の課題とこの年代まで身につけさせたい『技術』について、攻撃面を中心として考察し今後の指導に活かす。

■試合の流れ&全体像

立ち上がりから全体的にボールを支配し、攻守、守攻の切り替えも素早く相手の自由も奪っていた。静岡の10番プレイヤーである右サイド選手の突破が相手を苦しめていたことは間違いなく、そこからのセンタリングにおいて先制点が生まれた。その後、センターバックからボランチにおける不用意なパスミスにより、同点には追いつかれたが、後半もボールを支配し、3得点を奪い突き放した。

しかし、4-1で勝利はしたが相手ゴール前での精度に欠けた場面が少し印象として残ってしまった。

■静岡の課題と分析

◇アタッキングサード(ファイナルサード)でのボールロスが多い。

相手ゴール前において、ボール保持者がスピードを上げすぎること、ボール1個分のスルーパスのズレが得点を生むチャンスを減らしてしまった。ボール保持者が、必死にゴールを奪おうとするプレーは伝わり、迫力はあったが、それに反して繊細なボールコントロールとパスの強弱に残念ながら欠けていた。ゴール前の受け手(仲間)、敵、スペース、

そしてゴールを見る鋭い眼力を養うトレーニングが必要ではないかと感じた。

また、パスの出し手、受け手のタイミングをより合わせることで、より多くのゴールを演出できるのではないか。

◇ボランチからのサイド展開が少ない。

OFF THE BALLにおけるボランチの選手の見る量が少ないため、自分の距離から遠い選手を選択できないと感じた。ワールドカップ予選フランス対スペイン戦でスペイン代表のシャビを間近で見ることがあった。常にまわりを観てプレーする彼のプレーを見た池谷指導者養成委員長が、【シャビの首振り】と名付けていた。やはりサッカーの情報を得ることは見ることに確信した。ボランチを含め 360 度でプレーする機会が多いポジションの選手は、『多く見る量が良いプレーにつながる』と考える。

また、ショート、ショート、ロングパス、ドリブル（スリーパス、ワンドリブル）のリズム感がチームで共有されていれば、もっと相手を揺さぶり攻撃のスペースが生まれたのではないだろうか。さらに、DFラインからMFへのビルドアップにおいてリターンパスを何度か入れることで、より相手の眼を奪う（ボールウォッチング）ができ、相手の高い位置からのプレスも無効に近づけたのではないかと感じた。

■提言

◇パスの出し手、受け手のタイミングを合わせるトレーニングを数多く行う。

◇単純なトレーニングだが、3人でトライアングルを作り足下への速いパストレーニングを行う。

（リターンパスも入れながら、ダイレクト、ツータッチも交えて）

◇1試合で、シュートは多くて10～20本。パスやファーストタッチは、何百回。よって、ポゼッションサッカーを監督が目指すならば、トレーニングの比重をどちらに重きを置くかは言うまでも無い。しかし、シュートがサッカーの最も醍醐味であり、勝敗を決定づけることも確かなことでもあるので、シュート練習を否定するつもりは毛頭ない。

◇攻撃のイメージを選手が得るために、敵がいない状態でのイメージトレーニングも必要であると考ええる。

3) U-16 静岡県選抜 対 B.DIOMEDアカデミー(4-1)

■目的

国体への強化を目指すU-16 静岡県選抜のゲームを分析することで、U-15年代の課題とこの年代まで身につけさせたい『個人戦術』について、守備を中心として考察し今後の指導に活かす。

■試合の流れ&全体像

技術、アジリティー能力は相手よりも静岡の方が優れていたため、試合は終始静岡ペースで進んだ。相手は、GKのゴールキック、パントキックで必ずと言っていいほど長いボールを蹴らず、DFラインからのビルドアップのこだわりが見えた。しかし、静岡の高い

位置でのボール奪取が機能し、相手陣内でのポゼッションサッカーを披露し、シュートを数多く打っていた。静岡は地力で勝り勝利したが、より 11 人の連動性とシュートの質を高めたいと思えた。

■静岡の課題と分析

◇センターバックとサイドバックの関係を明確に。

相手MF ボールを持ちながら、ルックアップができた時に静岡のDFラインが半身の姿勢が取れずピンチ

を作られていた。予測と正しいポジションをとりたい。また、センターバックとサイドバックが門になってしまい相手にワンツートをされる場面があった。

◇少し攻め急すぎる傾向があった。

速く攻めることは決して、悪いことではない。急いでボールを奪われることが自分たちのチャンスを潰してしまう。

■提言

◇サッカーは相手とのボールを使った心理戦。

相手のショートパス主体のサッカーから、ロングパスは、受け手とアイコンタクトやタイミングが合えば積極的に行うべきパスであると確認した。ゴールを目指すという優先順位の確認を指導者はしたい。ショートパスだけが良いサッカーを生むわけではない。時にはクリアーなどの『捨てる球』も必要であると。

シュートも相手GKとの心理戦（タイミング・コース・強弱）であるということを、日頃のトレーニングから、コーチングをしたい。

4)U—16 静岡県選抜 対 INFF仏連盟エリート(0—4)

■目的

国体への強化を目指す U—16 静岡県選抜のゲームを分析することで、U—15 年代の課題とこの年代まで身につけさせたい『技術』『フィジカル』について、考察し今後の指導に活かす。

■試合の流れ&全体像

相手は 1 つ下の学年ということもあり、立ち上がりから県選抜がボールを支配し、シュートまで持ち込む回数が度々あった。しかし、決定力に欠け徐々に INFF に流れがいき、前半終了 5 分前にラインズマンの旗があがったにもかかわらず、審判はオフサイドを流し失点。その直後である前半ロスタイムにも GK と 1 対 1 を作られ失点。後半、県選抜がハイプレスからボール奪取し、何度か決定的チャンスを作りそうになるが最後のスルーパス、最後のシュート精度に欠け得点ならず。

一方、後半から投入された INFF の FW に突破し GK と 1 対 1 になり PK を奪われ、失点。さらに、県選抜のクリアーボールを拾われ 2 列目からの飛び出しへの、見事なまでにタイミングが合うスルーパスを通され 4 失点を許した。遠征最後の試合として、大変残念な結果になってしまった。

■静岡の課題と分析

◇ゴール前での『技術力』を高める。

勇気を持った裏への突き抜け（ボールラインより前のサポート）が頻繁にあるが、得点が取れなかったことに対して、出し手と受け手のタイミング・距離・角度を突き詰めると同時にスループアの質を求めていく。そして、ペナルティーエリア内でのボール保持者は、まず、直接視野として『ボール・ゴール・ボール』を見ることは前提であるが、間接視野で相手DF（敵）、GKを見る、なおかつ味方の動き・ポジションの情報も得ること。そして、勇気と責任感を伴う個人判断（シュート、ドリブル、パス）がゴール前での技術力を高めるのではないかと考える。I N F Fの選手らは、上記のような『質』が県選抜よりも高かったと思う。

■提言

◇勝利至上主義ではなく、勝利主義へ

指導者は、まず自分のチームが勝つことを目指して日々試行錯誤しながらトレーニングメニューを組み立て、その後良いサッカーを目指して勝利することを考えている。良いサッカーとは、指導者自身によって定義はそれぞれであると思う。チーム目標（県大会出場、県ベスト8など）から逆算し、個人への **teaching&coaching** を徹底的に突きつめる（積算）。この考えが、私は勝利主義であると考え。どのチームでも、どのカテゴリーでも、どのような環境でも、まず指導者は、勝利主義でありたい。

報告者:大石 知宏(静岡商業)

静岡県選抜チーム & 指導者研修会 日程

日付	時間	選抜チーム	時間	指導者研修会
3/21 (木)	12:45	成田発 パリ行直行便 AF275便	12:45	成田発 パリ行直行便 AF275便
	17:15	パリシャルルドゴール着	17:15	パリシャルルドゴール着
		専用バスにて クレールフォンテーヌへ(約1時間半)		専用ミニバスにてパリ市内ホテルへ(約40分)
	19:30	夕食(クレフォン) クレールフォンテーヌ泊		夕食 パリ市内ホテル泊
3/22 (金)	8:00	朝食	8:00	朝食
	9:30	トレーニング(仏人ゲストコーチ)		ホテル発、クレールフォンテーヌへ(約1時間)
	12:00	昼食(クレフォン)	9:30	選抜チーム練習見学
	15:00	トレーニング(仏人ゲストコーチ)	12:00	昼食(クレールフォンテーヌ)、食後パリ、ブローニュへ
	19:00	夕食(クレフォン) クレールフォンテーヌ泊	18:00	A.C.B.Bクラブ訪問、育成スタッフとディスカッション
			19:00	A.C.B.B U17練習見学 パリ市内ホテル泊
3/23 (土)	8:00	朝食		朝食
	9:30	トレーニング(仏人ゲストコーチ)		
	12:00	昼食(クレフォン)	12:00	昼食
	15:00	トレーニング(仏人ゲストコーチ)	16:30	トルシー市へ(約40分)
	19:00	夕食(クレフォン) クレールフォンテーヌ泊	18:00	U17リーグ戦観戦 TORCY VS SEDAN 夕食 パリ市内ホテル泊
3/24 (日)	8:00	朝食		朝食
	9:30	トレーニング(仏人ゲストコーチ)	9:00	ヴェルサイユ宮殿&マルシェツアー(午前中)
	12:00	昼食(クレフォン)	13:00	昼食(レストラン)
	午後	文化研修(ヴェルサイユ宮殿)		サンジェルアンアンレー市へ(約30分)
	19:30	夕食(クレフォン) クレールフォンテーヌ泊	15:00	U17リーグ戦観戦 P.S.G VS MONDEVILLE 夕食 パリ市内ホテル泊
3/25 (月)		朝食		朝食
	9:00	チェックアウト後、荷物移動後トレーニング	午前	
	12:00	昼食(クレフォン)、宿舎レオナルドダヴィンチへ移動(約40分)		昼食、リース市、レオナルドダヴィンチへ移動(約40分)
	15:30	ムードン市へ(約45分)	15:30	トルシー市へ(約1時間)
	18:30	強化試合① 対 A.C.B.B		トルシークラブ訪問、育成スタッフとディスカッション
	20:45	夕食(レストラン) レオナルドダヴィンチ泊	18:30	静岡選抜強化試合観戦
			20:45	夕食 レオナルドダヴィンチ泊
3/26 (火)		朝食		朝食
	9:30	トレーニング	午前	未定、 昼食
	12:00	昼食(ダヴィンチ)		
	13:00	イッシーレモリノー市へ(約30分)	13:00	イッシーレモリノー市へ(約30分)
	15:00	強化試合② 対 B.DIOMED アカデミー	13:30	B.DIOMEDアカデミー訪問 B.DIOMEDとディスカッション
	17:15	ウェルカムドリンク B.Dアカデミー主催	15:00	静岡選抜強化試合観戦
	18:15	夕食(レストラン)、食後STADE DE FRANCEへ	17:15	ウェルカムドリンク B.Dアカデミー主催
21:00	試合観戦 フランス代表 対 スペイン代表 レオナルドダヴィンチ泊	18:15	夕食(レストラン)食後STADE DE FRANCEへ	
		21:00	試合観戦 フランス代表 対 スペイン代表 レオナルドダヴィンチ泊	
3/27 (水)		朝食		朝食
	7:15	トロワ市へ(1時間45分)	7:15	トロワ市へ(1時間45分)
	10:30	強化試合③ 対 TROYES	9:15	トロワクラブ訪問、育成スタッフとディスカッション
	12:45	昼食(クラブハウス)、食後パリへ	10:30	静岡選抜チーム強化試合観戦
	15:00	パリ市内散策	12:45	昼食(クラブハウス)、食後クレールフォンテーヌへ
	19:30	夕食(レストラン) レオナルドダヴィンチ泊	16:00	FFF連盟エリート選手練習見学
			19:30	夕食(レストラン) レオナルドダヴィンチ泊
3/28 (木)		朝食		朝食
		パリ市内散策	午前	
		昼食	午後	昼食
	14:00	クレールフォンテーヌへ(約45分)	13:30	クレールフォンテーヌへ(約45分)
	16:00	強化試合④ 対 I.N.FF仏連盟エリート	14:30	FFF連盟エリート部門指導者とディスカッション
	20:15	夕食 レオナルドダヴィンチ泊	16:00	静岡選抜強化試合観戦
			20:15	夕食 レオナルドダヴィンチ泊
3/29 (金)	8:15	朝食、チェックアウト	8:15	朝食、チェックアウト
	13:35	シャルルドゴール空港へ(約1時間半) パリ発、成田行直行便 AF-276便 機中泊	13:35	シャルルドゴール空港へ(約1時間半) パリ発、成田行直行便 AF-276便 機中泊
3/30 (土)		成田着		成田着